

特51
905

昭和二十年四月六日

自序

世は獨り相撲と云ふものありて。獨で敵と

味を兼ね。自分免許の大關氣取。四十八手

のちを表貫抜かわせ脊負なけよ。八化ヨイ

の行司なく。何方が負ても我獨り。轉々々

笑の稽踊の土俵より。土俵圖もな

法螺をきを思ひ出せと演説は。始終發戲

の新工夫口から出まらせ芽茶。苦茶よ味贈

と糞とを混淆て。瓢葦なまづの戯浮戲。休。腹

をえぐりとお饒舌は。賛成ある歎。不同意歎。



底は如何り知れぬとも。笑ふ門に福來る。
 笑て損した者さな。泣て澁々暮すより。笑
 て暮すが命の洗濯。されは獨りで苦世々々
 と。物案トする窮屈を。儘の川へとツン流し。
 ナヤ面白いねへ。ナヤ可笑いねへと。諸君よ
 諸君よ御覽あれ。

明治二十年三月

骨皮道人誌

拍手滑稽獨演説目錄

- 金の有と無とは孰れり宜き乎
- 天麩羅の説
- 目當の説
- 道樂の説
- 油斷の説
- 奪とるく説
- 酒の利害を論ぜ
- 儘よならぬ浮世

○月と鼈との説

○競争の説

○細君の一言

○盆栽の改良を望む

○詰りどろする乎

○狹帯會

○丁稚小僧の忠告

○娼妓の現を抜すは野暮なり

○鶏と孔雀とは孰れか優る

○雪中の感

○自負の説

○居候先生の望む所あり

○似て非なるもの説

○事を軽忽に處す可あらむ

○日用の往復文は簡短にして解とやすきを要す

○十把一りらけ

○馬鹿り利功か

○情死は廢止にすべし

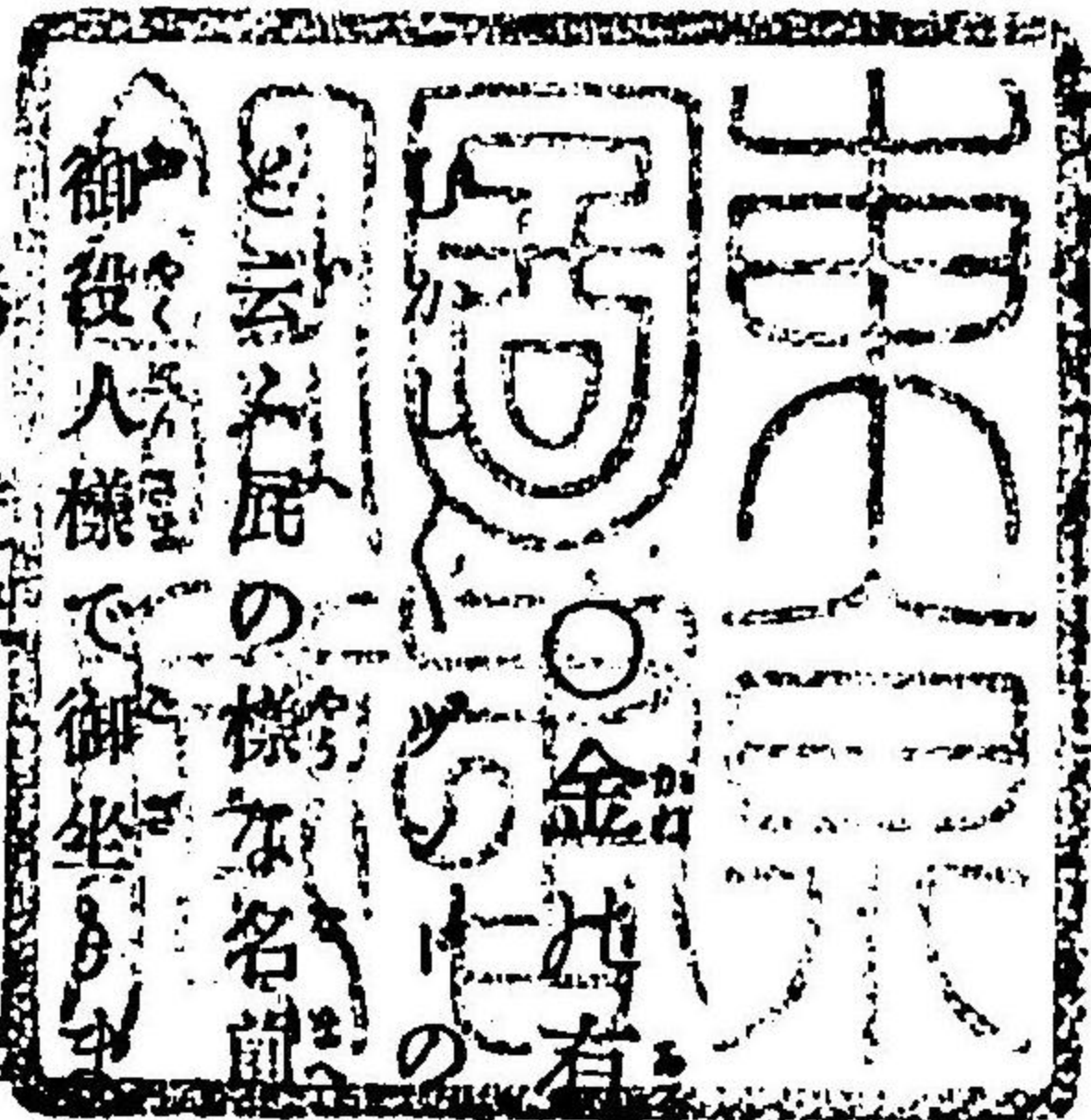
- 注意の平均にお頼み申す
- 占ひと頓智なる説
- 歳晩の話
- 恐るべき説
- 重言くらべ言葉の上あり

目錄終

拍手滑稽獨演説

瘦々亭骨皮道人演説

和良井鋤太筆記



と無とは孰れり宜き乎
 大往古いまのチャンく坊主の國で唐の代に劉伯蕪
 と云ふ居の様な名前の人がありまして此の人の禮部侍郎とか何とか云ふ
 御役人様で御坐りましたから贅澤の仕放題うまる物の食ひ放題で内に居
 る時の機妻とさし向ひで芝居に行の何日ころが宜じやらうナンカント
 鼻毛を伸し外に出てのガラくくと車でねし歩くと云ふ實に榮耀榮華
 に暮して居た人で御坐りましたが其御役人様の家の前を毎日く焚木を
 脊擔て通る老人が有て其老人が焚木を賣て歸りがけにのキツト酒に酔て

鼻端を唄ひながらサマ面白さうに歸つて來ますから彼の劉伯芻が之を不
思議にねもひまして一日みぎの柴賣老人を我家へ呼入れて申しまするに
の貴様の毎日〱焚木を背負て我家の前を通り歸りにキット酒を飲み
酒を唄ひ餘程おもしろき様子ゝの自己も羨敷おもひ自己なごの我身と朝
廷へさしだして扶持米と頂戴して居れば衣類も澤山あり食物にも差支あ
く僕も下女も數多ありて大層氣樂の様だが何じや箇じやと夜ひる共心配
ばかりで連も都々一ひと唄ふ餘暇がないが貴様の如何して斯様に樂し
むかと問たれば柴賣老人の答へて云ひまするに左ればで御坐います私
しは此町はづれの片邊りに九尺四方の小屋をましらへ唯一人で暮して居
りまして毎日二百文の錢を以て柴を求めおれを市街へ賣て利分を少し儲
けて餅を食ひ酒を飲みて小屋に歸り膝を屈めて抱き肱を枕にして夜をあ
かす老耄親父で御座りまするが最早年齢を取て居りますれば家や衣類の
望ももなく罪と犯しませんければ恐れもなく貯へた金もなければ泥坊に

とられる氣遣ひもなし依て一合り二合の酒を飲で此上もない樂として居
りますと云ひましたれば劉伯芻の益〱羨ましく思ひまして又云ひます
るに賢人どの貴様の事じや成程さう云ふ了簡で暮して居れば樂しい事
であらう去りおがら今すこし利潤が多ければ猶更たのしい事であらうト
錢一貫文を出して遣ましたれば柴賣老人の大層よろこんで歸りました然
ちと其翌日から焚木をドツサリ背負て市街に賣りまして歸途ときよ酒
も飲ず酒も唄はず忙しさに歸りますから劉伯芻も不思議と思つて居り
まして凡そ三十日も經て彼の親父が劉伯芻の家へ來て錢一貫文を放り出
して申しまするよ且旦那の間有がたう御坐いましたか此錢がありま
すと荷が重くツて汗水を流さなければならず又世にの残りをお屋へ隠し
て置ものですから若し泥坊でも取りいせぬかど急いで歸ります故さけも
飲んことが出來ず酒を唄ふことも出來ませんから此錢の御返し申しますと
放り出して去りましたさうで御坐います(ヒヤ〱ノウ〱)また無住和尚

の曰く財多れば身を害し名高ければ神を害すトこの理屈に因て考へて見
 ますると金銀が澤山あるのを福徳なり安心なりと思ふの大なる間違ひ
 で御坐いませうヒヤ〜金銀が澤山ある爲お身を害する者も問々ある事
 で御坐います左傳にも愚人罪なし玉を抱いて罪ありト書て御坐いませう然
 て見ると寶が無ければ罪もなく科もなしで濟ものを寶があり金がある爲
 に罪人も出来また我身も害せられる事もあるので御坐いませう故お金さ
 へ無ければ盜賊に取られ押込み殺される氣遣ひも有りませう金がある
 から盜賊の心配もし強盜又殺される事もあるで御坐いませう然らば金の
 有が仕合か金の無が仕合か少しも分りませんヒヤ〜ノウ〜ひかし子
 路と云ふ人が孔子又問て云ひまするに君子でも貧乏する事があります
 かと聞ましたれバ孔子答て君子の固より貧乏するものヒヤと云ひました
 然て見ると貧乏人の皆君子で御座いませう歎また曾我鬼王の孔子との反
 對説を唱へて四百四病の煩ひより貧乏はどつらさ者のなしと云ひましたか

成程この説の當今に適切なる泣言で御座ますから道人の孔子の説よりの
 鬼王の泣言を賛成いたしましませう〜何故なれば此世の色氣三分に
 慾七分で立切て居る世界で御座いますから縱令小人と笑ひれようが強慾
 張と憎まれようが吝嗇坊と瓜憚きをされようが爪先で火を燈すと鼻を撮
 まれようが何でも艱でも金が無ければバメで御座います昔時の金も無く
 財産もあしでも青表紙五六冊さへ讀で居れば高慢痴癡の而付をして法螺
 を吹て君子の固より窮すと構へ込で威張て居られたあれども此文明開化
 の回り燈籠の際中に其様よとの飯が食ませんヒヤ〜今世の何でも蚊
 でも金のある者には逆も勝つこの出来なない時節で御座いますから金の功
 能の中々ひかしの様ももので有りません今手短に金の功能を並べ立て
 見ますれば金のある者の世間がイクラ不景氣でも頓着なく米相場が高く
 爲ても安く爲ても關係なく田畑の地價が安く爲ても知らぬ顔の半兵衛さ
 んで澄し込み虎列刺病が流行して來ても箱根に逃れて居れば差支なく酒

致しすま(ヒヤ)くくく)

○天麩羅の説

諸君よく諸君も豫て御承知で御座いませう彼の大道の片隅また四辻の角に於て取捨進退の自由ある家臺店と名くる小さき店をひらき油紙の障子にてんぶらの四字を顯しシビくの聲の耳を買ぬきブンくの香の鼻を穿ものい云はずと知れた天麩羅店で御座いませ此天麩羅の一箇が五厘あるひの一錢で井飯に添て食と随分うまぬもので御座います又別に天麩羅茶漬とて一人前三錢五厘乃至五錢と云ふ手輕店も御座いますが孰れに致せ餘り上等の食物では御座いません而して此天麩羅と名けたるの如何なる所謂因縁で御座いませる歟の名稱の取調の跡廻し又致しませ先づ天麩羅の性質如何をお饒舌にたしませう(謹聽)抑てんぶらと申す物の魚類または野菜物を温飴粉にて包之を胡麻油の中に投入て煮たもので御座います夫故見た處の外面の大層立派で美事を様でもろの内部

の品物の清鮮ものか腐敗た物か別辨する事の出来ません故に若し誤つて腐敗た物を食すれば忽ち虎列刺病の媒介となりてゲロくビチくの騒動をおつ初める事が御座いませナント恐る可き食物での御座いませんか(ヒヤ)く夫れ然り然らば天麩羅を食ふときには能く其品物を吟味して食おければ成ません故に道人の此天麩羅の如く外面ばかり美事にして其實際の善悪を知り難き物の残らず天麩羅と申しても宜からうと思ひます若し夫れ外面ばかり立派にして實際然らざる物を悉く天麩羅と仕ますれば其類ひの随分たくさん御座いませ昔日ある人が紺の單衣を柳原で買て着て歸り掛に夕立に逢ました處が其着衣から正一位稻荷大明神の大字を顯はして大層笑はれたと云ひませ是の斯様な胡麻加子ものを賣たのの素より賣人が悪ひよ相違ない左れども之を買人が唯外面ばかりを見て其品物の性質を能く調べないからで御座いませ即ち古着の天麩羅を買かぶつたので御座いませ(ヒヤ)くまた銀座煉化どほりの瓦斯燈あきらかな

る處に一枚の紐を敷き其上に金銀赤銅象眼の烟管金物と金らん純子狸々
 緋の財布たばこ入等を並べて居りますその露肆で御座いまするが田舎漢
 赤ん坊が此露肆の品物を見て大層立派な品で直段が安いと思ひまして銀の
 烟管を五十錢で買ひ旅宿へ歸て調べて見ると雁首の處から眞鍮がヒカリ
 ばかり顔を出て居るので初めて贗物と知りて胆を潰しヤア權作やいクレ
 見さッしやれ銀の烟管だアと思つたアに眞鍮だんべろじやないかクレは
 ア堂したら宜かんべろと鍍金の烟管を捻くり回して其欺かれたるを後悔
 致しまするは是も矢張り外面ばかりを見て其眞味を調べませんからの鹿
 想で即ち夜店の天麩羅を喰ひ込だので御座います(ヒヤ)また白粉を眞
 白に塗りて山凹の痘痕つらを埋込み半天一枚を肩にかけて縋々の着物を
 かくし樹木の蔭の暗き處に立て別嬪を氣取り角燈の光を恐れながらモシ
 モシの聲を掛て助倍的を捻にし僅か又八錢か十錢の安直めて春情の切賣
 をするは則ち是れ私窩的天麩羅で御座います(ヒヤ)又彼の六曲屏

裡に細々痴を説き三浦團上に密々情を話し(オ)ツト餘り堅過(タ)惚れもせぬ
 のに惚れたと云ひお前はんゝ意氣でおますと云ひお前はんゝ眞實又實が
 おます杯と口から出放題を饒舌り可笑くも無い又笑て見たり嬉敷もない
 に喜んで見たり或は愛嬌を含んで莞爾笑つて見せ或は心切らしく虚涙を
 こぼし或は(ヒヤ)の文切形を並べて眞實らしく持掛るゝ娼妓の手
 管すなはち女郎の天麩羅で御座います(喝采)意氣を二上り三下り雪の巴に
 降繁る夜や又ハ梅にも春の色多へる日にナンタンシヤンとペコ(三)味
 線を弾き損料の紅裙を翻へし胡麻化子の香ひ袋を香はし鼻下長その人を
 して魂を迂頂天外に飛ばしめ其体裁の箱入娘の様なれども其實際の火の
 車を軸そのもの即ち安猫の天麩羅で御座います又英國製の帽子をかぶり
 佛國出来の靴をはき大鯨公糞をくらへ儼なら百疋でも来いと云ふ勢ひよ
 て鬚を捻くりながら法螺を吹て物知り顔をするゝ山師の天麩羅で御座い
 ます(聴)聴く(ま)また門口に何々先生出張とか診察とか云ふ看板をかけ限る

よ正午十二時を以てし病人の來のと待つ事恰も甚助客が廻し女郎を待た
 如き有様なるも瘦我慢に瘦我慢をして名醫ドクトルを氣取り玄關ばかり
 強氣よ構へ込むの藪醫竹庵の天歎羅で御座るまを又たわづかに翻譯書二
 三冊を讀み某黨に加盟し高慢面をして片言まじりの小理屈を吐き唯我獨
 尊で堂々たる政事家を真似五大洲まる呑の大法螺を吹きとばし傍聴料の
 割前を貰つて聊か下宿屋の云譯をするの當時はい出し生物知りの書生の
 天歎羅で御座るます(ノウ)又手又文久錢を握り館屋の尻おついで
 走り口又薩摩芋を嚼て山神の跡を慕て成長し裏店娘が一朝けいあんの手
 に掛り壽公の御意に適う所となり昨日の笊をさげて味噌を買ひし今日
 の氏なくして玉の輿に乗りうつり長烟管ひだり團扇の贅澤をなし面附輿
 様を氣取り体裁お嬢様の仕打を爲すは是れ權妻の天歎羅で御座います其
 他事々物々一として天歎羅であいもの有りませんなれども餘りお饒舌
 が過ますと大目玉を喰ひますから先づこの邊でお仕舞又致しませんが何に

致せ諸君のこの天歎羅を喰ひろこねぬ様になさいませと御注意を申すも
 の、道人も矢張り天羅人物で御座います(大喝采)

○目當の説

いま道人が突然に斯様な題言をかつぎ出しましたならば諸君移るひり將
 あ云いれんどす骨皮道人の氣でも違ひのせぬか何を目當に可笑な題言を
 かつぎ出したのだらうと成程御尤もの御不審で御座いますと去あがら少し
 く目當があつて此題を掲げました譯で強ち目當のない氣ちがひ沙汰では
 御座いませんエヘン夫れ目當と申すの俗に云ふテモハッ書生さんの被仰
 る目的また演説家の謂ゆる計畫で御座いますして何事に限らず何物を問す
 之を未前に計り遠きをおもんをかり先をうんがへて之を胸の中に留て工
 風そる之を目當と申します即ち彼の尺蠖の縮むの將に伸んとする目當あ
 り猫の目玉を潜めなき聲を止めるの鼠を捕うと思ふ目當が移るからで御
 座いますせう夫れ尺とり虫や猫にでさへ斯様な目當が御座いますれば堂々

たる万物の靈長と自稱し五尺の身體を維持し二箇の墨丸を所持する人間
 でありながら何の目當もなしに毎日あくせく稼ぐ者の恐らく有りませ
 い夫ども何の目當もなく愚圖々々ポーンヤリ日を暮す者あれバソレコッ
 無神經無慾人大馬鹿の三太郎ヒヨットコ漂碌玉にて即ち出世の目當なく
 行末の目當なき人物と中さあければありません(ヒヤ)併し乍ら今道人
 が見渡す處よての皆お利功な方ばかりで御座いますからノウウ(必す
 皆さん方に於ても何か目當がある)相違なひが扱この目當又種々様々の
 區別がありまして人間が違へば随つて其目當も異つて居るもので御座い
 ます故又十人よれば十色とか三人よれば文珠の智慧が出来ると申します
 何故三人よれば文珠の智慧が出来ると云へば即ち各自の目當が違うか
 らで御座いませう然れども目當に大小善惡また正邪曲直のあるもので馬
 鹿の馬鹿だけ(是れ失敬)の目當あり才子の才子だけの目當あり又かね儲け
 を目當とする者あれば出世を目當とする者もあり邪惡を目當とする者も

あれば正道と目當とする者も御座います但其正道を目當とする者の早い
 か晚いか其目當を成就して其身あん樂をさきはめ邪惡と目當にする者の到
 底發覺して其身に赤い着物を着て鎖つちぎとなります是れ佛家の御説
 教又云ふ輪回應報天道様の見て御座るに因て御座いませう(ヒヤ)「
 小格子女郎謡て曰く何を目當に居續けしやんす。私しの釵しや銀じやあ」
 「是れ目當又す可からざる事を目當にするゆゑ飛でもない赤恥を搔ので
 御座いませ月照の詩に曰く埋骨豈唯墳墓地人間到處有青山これ男子の志
 を奮起しその目當を達すべきを謂たので御座いませう(ヒヤ)「然れ
 ども此月照の自分の目當を達せず又青山に到らずして途中で薩摩の海の
 土左衛門となりましとの實に惜むべく慙むべき事で御座います(ヒヤ)「
 去ながら又一方より考へて見ますれば其目當たるや其人不相當で有つた
 のかも知れません故に諸君も目當を附られる時の我身分相當の目當を考
 へ爲し得べき目當と爲し得べからざる目當とを判別し然る後たしかある

目當を定めなければ成りませぬ(謹聴)シテ又たしかる目當を定める
 如何なる目當かと云いまそるも即ち身分相當の目當で御座いまして
 商賣人の商業上の事について目當を定め百姓の作物の事に就て目當を定
 め職人の其職業に就て目當を定め醫者の其業に就て目當を定める等の
 事で御座います諸君よ試みに彼の目當に迷ふ書生さんを御覽なさい昨日
 の法律學士と爲らうと思つて法律書をよみ今日の究理學者に變つて究理
 書を學び或は經濟書をかぢり或は政治書を捻くり其目當の變化して定ま
 らざる事恰も猫の眼の様で御座います左れども人ありて其目當を聞か
 ると其まごつき先生の肩を怒らして云ふ僕の少なくとも二百圓ぐらゐの月
 給を取るつもりだといやハヤ呆れ返つた次第で御座いませぬか(ヒヤ)ノ
 ヲウ)今もし此書生さんが理學なり化學なり醫學なり文學なり法律學
 なり政治學なり經濟學なり天門學なり何なり蚊なり一方を目當として大
 切お守りせつせ)と勉強それバ或は其目當を達し得ることも有ませう

けれども如何せん其學ぶところ區々不定にして其こゝろざと所滅法界の
 見當ちがひ故にその目當の外れるの勿論却て一事一業とも脩ることが出
 來ずして半端の人間となりませぬ是れその目當が不相當で眞の目當でな
 いからの事で御座いませう(ヒヤ)ノウ)又こゝに一人の商人があり
 まして此商人が始め呉服店を開きしに其利益我目當の如くならず依て暫
 時にして此店を閉ぢ又料理店を始めし處この利益も自分の目當をほりに
 行かぬとて暫時にして之を止めまた米商に移りしに是も面白からぬとて
 之を止め又酒屋となりしは是も氣も喰ひぬとて之を止める等いろ)様
 様手をかへ品をかへ其目當を變化して金儲けを爲したるもの未だ之を
 聞た事が御座いませぬ是れその目當とする所が眞の目當でないからで御
 座います(ヒヤ)道人が斯の如く論じて來ましたならば諸君あるひは將
 に云はれんとそ凡そ人の目當を附るゝ先づ遠大を期すべく又ときどき場
 合とに因て變轉すべし唯西も向けば年中西に向き東もむけば何時までも

東又向て居るのは策の得たるものでは無いト諸君ヨ暫時の間わる口を敲くを止られよ其時と場合に因て變轉應衝するの兵法の極意にして人と病症とよ因て調合配劑するの醫者の匙加減ある事の骨皮道人うす馬鹿と云へども素より之を知て居ります道人が目當と申すは西にむけば年中にしに向ひ東又向ば何時までも東を向て居ると云ふ様な其様を馬鹿くしき譯柄を謂のでは御座いませぬ道人の申す目當とは其時と場合とを見透す事が出来ずして無暗矢鱈よりの目當を變じ又出来ぬ事を知りながら無理に之を仕様と變な目當を附る者を云ふので御座います若しそれ時と場合を見透す事も出来ず又臨機應變の目當を附る事も出来ないで却て人の邪魔をする様な者のイツの事ねん中西にむかひ何時までも東に向て居る方が却て宜いも知れませぬ故に小僧は小僧だけの目當をつけ番頭さんは番頭さん丈の目當をつけお三はお三だけ權助は權助だけトみな夫れ相當の目當をつけて宜く稼ぎ能く働くが上分別で御座いまして決して

小僧お三權助に均しき一山百文の身分を以て吐表途徹も奇い見當ちがひの目當をつけては成りませぬナント諸君御合點がまゐりましたか(喝采)

○道樂の説

諸君よ道樂と申す事は何のことで御座いませうか道人のろの道樂と云ふ文字の知つて居りまするけいどもその道樂とい如何なる意味で御座いますか其譯を密かにする事が出来ませぬ然れども茲に酒を飲で毎日くへレケの人あり傍らの人の志のへレケの酒飲を指して酒道樂の人と云ひまするから道人も此へレケを指して矢張り酒道樂の人と申し又ふんどしを質に置き罌丸を抵當にして芝居にゆき自分の飯を喰て人の假聲を遣つて喜ぶ人あり傍らの人これと指して芝居道樂の人と云ひまするから道人も矢張斯様な人をさして芝居道樂の人と申します去れども人が云ふからとて其意味も知らずに口に饒舌の取もなほさず人の口眞似で鸚鵡の嘴も同じ事で御座いますから道人の内々耻ぢて居りましたが(謹聴)

一夜の事でした三錢を奮發して寄席へ出掛ました處話し家先生の申しま
 するよの男女どもに三道樂とて各三ッ宛の道樂のあるものとして男の道
 樂の酒よ女郎買に最一ッは〇〇て御座います又女の道樂の芝居よ南瓜に
 薩摩芋で御座いまして此三道樂のないもの男の面をして居ても男の仲
 間入の出来ぬ女の姿をして居ても女で無いと申しました然て見ますと
 道樂とい何でも人並はづれて度外れに沈溺こむ事を道樂と申すので御座
 いませう若し度外れに沈溺こむことを道樂と申すと致しますれば此世界
 の道樂世界この人間の道樂で持切て居りまして唯僅かに三箇ぐらゐの道
 樂で御座いますまい(ヒヤ)いま其種類を並べ立て見ませうなれば彼
 の地面も數箇所あり貸長屋も數十軒ありて公債証書に寄り掛つて居雁を
 して居ても安樂に暮される結構な身分でありながら身おは縷々の若物を
 纏ひ口には鹽辛い煉味噌をなめ義理や人情はカツパの尻ども思はず唯泣
 言ばかり並べて鴉金を貸付け日歩のあがり高を喜び慾張り一方よて轉ん

ても只の起ぬと云ふ伊勢屋主義を守る人を見れば實に世界の厄介者の様
 で有りますするあれども其當人よ於て此上もなき樂とて即ち一種の道樂
 で御座います(喝采)抱て寐るよの相應の女房あり相談相手よの立派お息子
 もありおがら耻敷も思はず後家をくどきお三に這込み女郎を買ひ私窩的
 に溺れ頭はげても浮氣の止めぬの嘲笑を招く者有り實に世界の厄介者の様
 なれどもあれ亦一種の道樂で御座います又カン／＼頭上かゝ照して霍亂
 を引起す様な暑中も構はずヒウ／＼横面を吹て風邪と引さうお寒中も恐
 れず釣竿を持ってボンヤリ川端にすはりおと網を携へてシホ／＼水の中に
 立ち朝から晩まで骨を折り小魚一疋も捕ないで馬鹿の綽号を附られるの
 實よ世界の厄介者の様なれども亦あれ一種の道樂で御座います(ヒヤ)／＼
 着物を質に入れ家作を抵當よし親類の異見も馬耳東風に澄しおみ友達の
 忠告も蛙の面よ水でシヤア／＼に構へ込と無暗に酒をのみ矢鱈に威張り
 散し小供を叱り付け女房を張り倒し亂暴狼藉で氣違ひの名稱を蒙り度々

警察の御手数を掛るのの實に世界の厄介者の様なれども亦あれ一種の道
 樂でよんどある無い事で御座います(ノウウ)口の端に素敵をナボレナン
 鬚を生し襟邊に減法界を時計を引かけ腹の中の中からッぽでも口の先に
 の洋語と漢語をチャンポンにつかひ何にも知らぬ者から見れば大層な學
 者か立派な大盡の様に見せ掛けて一杯くひせる胡麻かし先生は實に世界の
 厄介者の様あれども亦これ一種の道樂で御座います(喝采)また凹凸で不具
 な出來るまじの古茶碗や古器具を集めツクイモ同様き山水を愛し口よ
 の名月やの兼言と迂鳴り手にのヒン曲りの盆栽を捻くり回し人の不景氣
 や難澁の十年が百年でも辛抱すると云ふ人物も傍らより見れば實に世界
 の厄介者の様なれども亦あれ一種の道樂で御座います又彼の朝又は熊公
 と送り夕よの吉公をむかへ二本の腕の千人の枕とあり二枚の唇は万人に
 なめられ他より之を見れば憫然の至り可愛想を様あれども其御本人の却
 つて平氣の平左衛門で苦海の中に樂郷を求め金と力とのあい情夫の爲に

内所の借金をまし衣類を質屋に飛し悲歎の上に猶苦勞を招くの實に世界
 の厄介者の様なれども亦あれ一種の道樂でございます一日の中に何度も
 井戸ばたに寄集り各自に勝手はうだいの出鱈目をグチャグチャ饒舌り互に
 宿六の赤耻をベチャグチャ棚卸をして夫から隣り近所の噂差配人の短所や
 ら地主の不人情やら有ふと無こと口から出まかせお饒舌り散し飯のあげ
 附にも顧着せず小兒の泣にも構はずベチャグチャグチャお饒舌をする
 山の神は實に世界の厄介者の様なれども亦あれ一種の道樂で御座います
 (ノウウ)其他ろん料の着物を放り出して損害金をとられる相撲道樂もあ
 れば飯時を忘れて夢我夢中な碁將碁にはまり込む道樂もあれば虎列刺病
 を屁とも思はず無茶苦茶又喰込む道樂もあれば家業を打捨て無暗に遊ぶ
 道樂もあれば着道樂あり恐くち道樂有り見道樂あり洒落道樂ありて道樂
 の種類を並べ立ますれば中々一日や二日に勘定の出來ない程ございま
 す左れども右も申し陳せした道樂の多少の害の有りませれども其害の僅

かよ一身一家の害に止まめて居りますから敢て尤むるおの及ばぬ譯で御坐りますなれども元來まの道樂と云ふものは謂ゆる同氣あひ求むるの害がありまして鬼角人を誘ふもので有ますゆゑ自分が藝者買が道樂だと又人をも藝者買をすゝめ自分が女郎買が道樂だと人にも女郎買をすゝめ自分が酒飲の道樂あれば人にも酒をすゝめ自分が相撲道樂あれば人にも相撲をすゝめる等なんだ艱ぶと我道樂へ引づり込み眞正面な人間を道樂者にする様な弊害の何に拘らず免れざる常情で御坐ります(ヒヤ)故に諸君の縦令いか様の道樂に御熱心でも唯御自身ばかりまの道樂をして決して他人をして無理に我道樂に引ずり込む様を弊害を止らせん事を冀望いたします(ヒヤ)くく)

○油斷の説

諺に轉ばぬ先に杖をつき石橋を叩て渡れと云ふ事が御座りますすが是れは轉んだ後てア、杖をついて来れば宜かつたに後悔し尻と放て後に尻を

つばめる様な手抜けのさい様よとウツカリ者の油斷を戒めたる金言で御座ります諸君試みに御覽なさい彼の夜行のとき足を溝泥の中へ踏おみ是は失策たど狼狽の一夜のくらい故ての有ません足元に油斷したると提燈を持って出掛ないゆゑで御座りますして既に溝泥の中へ足を踏こきたる時になつてア、提燈を持って来れば宜かつたにア、足元に氣を附て歩行は宜かつたにト我油斷と手抜を後悔しても最はや後祭りの提燈で迎もおつつく譯で御座ります又まゝに人ありて女郎を買ひ地獄にはまり込み窮かに以爲らく女郎や地獄に煤毒が有るから宜加減にして廢止なければならぬ然が最一度女郎を買ひ今夜と女郎の買ひ仕舞とそれバ大抵煤毒の傳染もあるまい地獄に通うのも今宵かぎりとすれバヨモヤ煤毒の氣遣ひも無からうと今一度ヨモヤと云ふ中に惡症梅毒を取つかれ横根となり揚梅瘡とあり頸のまひりに穴を生じ鼻の頭を開墾せられてフガのひと爲變りア、馬鹿く去い目に逢たア、つまらないと急にその油斷を後

悔しても最はや火事あどのポンプ死んだ子のと勘定十日の菊六日のあやめ晩時ばんじのとうがらして何の役にも立たせん（ヒヤ）是等の理屈りくつの始はじと噛かつて居る小供こどもでも罌丸えいじゆんのあい婦女ふにょ子でも百も承知しやうち二百も合點がつてんの事で御座ごいまするが猶なほ一步を進んで油断ゆだんの大敵たいてきなり油断してのからぬと云ふ仔細さいしゆを申し述べませうエヘン凡おほろ何事なにごとによらず何物を問はず針はりほど小さい事でも棒ぼうほど大きい事でも不用心ふようしんと油断ゆだんから起る災禍わざはひと云ふもの實じつに恐るべき事で御ございましたして此世界このせかいにパンと米こめとを喰くて居る者の常にウツカリしての居られません謹聽（な）何故なにゆゑと申せば両親りやうしんの未だ小供こどもだ嫁さんどどや飯いひごとをして遊ぶやうな色氣いろけなしだから未だ大丈夫だいぢゆうぶだと安心あんしんして居りまする何がさて肩揚かたあがりの未だ下りくだりあいでも何時いつの間にか情夫じやうぶをこしらへお前まへさんどあらば何處どこまでも深山みやまの奥おくのび住居すまひ手鍋てなべさげても粥かゆと噉くつても情夫じやうぶのおそばそば居ゐたい傍そばへ呼よんで置おきたいと媒介なまこあしの約束やくそくして湯ゆの歸かへりやら寄席よせの早出はやでやら顔かほを見るのが何なにより樂たのしむだどコソくやらか

して居る中なかサア大變たいへんはちまきを腹はらへめなればならぬ様な場合ばあひあ爲たうて二進にんも行ゆぬ所ところから尻しりに帆はをかけて港みなととかし出だし或あるひ一層いっしやう上手うまもあると二人ふたり崩たふつて大川おほがはへドブンをさめ込こむに至いたり親おやの知らぬうち早はやや新聞紙しんぶんしに掲載らいていして居ると云ふ様な事は近頃ちかごろたくさん有ある様やうと思おもはれまそが是これ即すなはち親おやの油断ゆだんより生せいずる騒動さうどうで御座ごります（ヒヤ）くくく（たま）くく（たま）くく（たま）鼻毛はなげのちがひ人ひとを生捕せいとらてまづ一週いっしゆかん間の米代こめしろにありついたらと安心あんしんして妖術まじゆつを待まち合あひの奥座敷おくざしきに施ほし痴話ちしやと口説くちごとの胡麻ごまかし三味線さんまいせんを假かりの枕まくらにベチヤクチヤの眞際まぎわ中屏風ちゆうびやうぶを蹴けたをして〇〇さんに飛込とびこまれ遂つひも拘引こういんとあり罰金ばちきんを食くらふのハ安猫やすねこの油断ゆだんで御ございます又娼妓しやうぎの云ふ事ことを眞まにうけ時次郎ときじやうを氣取きとりて雨あめの降ふる夜よも雪ゆきの日ひもメラくグズく居ゐ續つづけして遂つひに廢嫡はいちやくの身みとちるハ是れ遊治郎いうぢやうの油断ゆだんで御座ごります又相場まがはを考かんがへて今度こんどハ一番いっぺんぬれ手で粟あををつかんで十日じふにちたぬ中なか又銀行ぎんこうを一二箇所いちにじくしょこしらえ様やうと無鉄砲むてつぱうにも米相場こめまがはへ手てを出だし目めたなく間まに身代しんだいと捧ほうに振ふるこれ慾よくばり者ものの油断ゆだんで御座ご

ふもの、横取で御座いまそるが何に致せ奪ふと云ふも
 餘り宜いことての御座いません(謹聴)いま此世界を見渡しまするに往
 古も現今も彼の奪ふたり奪られたりする事柄の随分たくさん御座います
 依てその奪ふたり奪られたりする事柄をノベツにお饒舌り致しますれば
 エヘン大師の名は弘法お奪られ大問の名の秀吉にうばられ美人は小町楊
 貴妃に奪られ色男は唐琴屋丹次郎に奪られ滑稽は彌次郎兵衛喜多八に奪
 られ男達の幡隨院長兵衛に奪られ大泥坊の石川五右衛門にうばられ水死
 の土左衛門に奪られ忠臣の楠正成よりうばられ大將は源義経も奪られ圍碁
 の先生は本因坊も奪られ将棋の名人は大橋宗桂に奪られ禮式作法の小笠
 原流も奪られ俳諧の宗匠の芭蕉も奪られ劍術の荒木又右衛門に奪られ腕
 力の岩見重太郎に奪られ親孝行の廿四孝に奪られ情死の先祖のおはん長
 右衛門に奪られ傳染病の名のコレラに奪られ銀行は三ツ井も奪られ飛脚
 のおしの郵便に奪られ郵便の便の電信も奪られ籠屋の人力車に奪ると人

力車の客の馬車に奪られ和船のけんのんの蒸氣船の堅固に奪られ會席料
 理のお客の西洋料理に奪られ書生の學資の女郎に奪られ壽公の俸給は藝
 妓に奪られ下駄商賣の靴屋に奪られからかさの職分は蝙蝠傘に奪られ毛
 氈の威光はケツトに奪られ手拭の職はハンケチーフに奪られ附木の不便
 のマツナの簡便に奪られ有税のたばこの無税の巻烟草も奪られ和服の仕
 立屋は洋服の裁縫店に奪られ娼妓の商賣は尻がる猫に奪られ細君の權力
 の權妻に奪られ漢方醫者のさし加減の西洋醫者の氷加減に奪られ行燈の
 くらさのランプの明かす奪られランプの明かす瓦斯燈に奪られ瓦斯燈の
 威光は電氣燈に奪られ八景の近江も奪られ月景の田毎に奪られ蕎麥は更
 科に奪られ豆腐は笹の雪に奪られ茶の宇治に奪られ櫻の芳野も奪られ花
 魁の吉原も奪られ筆耕者の活字も奪られ木板師の活版職も奪られ熊的の
 女房の八公に奪られ田舎漢の財布の畫どんびに奪られ姉のかんざしの妹
 に奪られお袋の臍くり金の放蕩息子に奪られ縁むすびの神様の出雲も奪

はれ縁切の神様の板橋の榎に奪られ氷の名産は函館も奪られ鯉節の土佐
 さけに奪られ鼻まがりの鮭の南部に奪られ銘酒の伊丹も奪られ尻がる
 女の相模に奪られペラボウ言葉の東京に奪られサウジヤカイの京坂に
 奪られナイくの返辭の肥後に奪られバツテンの挨拶の長崎も奪られ帳
 尻の胡麻化子の番頭も奪られ空腹と不性の居候も奪られ金持は七福神に
 奪られ小供の菓子の子守に奪られ雑録の趣向と朝野社に奪られソラデマ
 の廣告はさつやに奪られ滑稽雑誌の團珍も奪られ花柳粹誌の吾妻新誌
 も奪られ膳の肴を猫に奪られ庭の靴を犬に奪はるゝ等奪はるゝの種類を
 數へますれ何時まで僥舌でも方圖のさい事て御座いますから奪はるゝ
 の事柄の先づ此位にして置まして猶一言してお仕舞に致しませう又手斯
 様も奪はるゝ者たくさん有まるとも皆些々たる河童の尻と同様の
 事て御座いますから縱令あれを奪ふものが有ましても又うばわれまして
 も私に於ては何のへチャとも思ひませぬ何故なれば其奪ふも奪はるゝも

内國中の融通で御座いますして一寸申せば親類友達の遺縁で御座います(ヒ
 ヤ)去れども何よまれ蚊にまれ外國即ち他人に奪はるゝ場合に至ては
 御同様に額も八をよせて一思案せねばなりませぬ(喝采諸君もし他人に奪
 はるゝが嫌だと思召さば奪はるゝの手抜に注意して彼より奪い取る手段
 に立廻つて下さる彼の我刀劍を奪はれて我命を奪はるゝ様を頓魔に陥る
 は皆わが精神を他事に奪はるゝより出来ざる失策で御座いますト聊か奪
 はるゝ文句を列べて奪はるゝ人に告んが爲め奪はるゝのお儲舌をいたし
 ました譯で御座います(ヒヤ)くく)

○酒の利害を論ぜ

酒の飲べし飲む可からずと云ふ事誰が此様な出鱈目を云つたものか私
 のぞんじませんか酒の飲べしと云ひ又のむ可からずと云ふの何だか酸
 味の股倉膏藥また様で御座いますすが能く考へて見ると決して酸味な
 またくら膏藥で御座いませぬ抑く酒の百薬の長と云ひ愛ひの玉箒と

申しまして世の中に酒はど結構千万の物のありまますまい故に劉伯倫と云ふ變人の酒徳頌など、手前勝手の名前を附て日月は窓だ天地の家だなどど大法螺を吹飛ばし李太白と云ふ親父は一斗の酒を飲バ百篇の詩を作るあど、大平樂を吐鳴ちらし又唐人の寐言に借問酒家何處在と酒屋を尋ねてマゴ附し人もあり又日本人の放題酒なくバ何の己が櫻かなト素齒抜をやらかしと者もあり又酔て枕す美人の膝醒て握る天下の權どの英雄豪傑のふるまひで御座いまして酔た酒なら醒ざアなるめへ醒た上での御分別とい平右衛門の假聲。酒の飲でも飲いでも務める時には屹度つとめる武藏の守どの高野師直の悪たれ口で御座います又蘇子瞻の酒を携へて赤壁の下に遊び隨の楊帝の酒池肉林の贅澤をやらかし赤垣源藏の酒を飲だが爲に徳利の寶物を遺し穢七の酒の力によつて入鹿を亡したと申す事でも御座います去ながら是れいひかしの事で其實斯様も事が全く有つた事やら丸で虚言やらサツパリ譯の分らぬ事で御座いますから此様な昔しばな

し先づ姑らく措まして一寸手近の事について申しませう(謹勝)諸君よ彼の上野向島の櫻が爛熳と開いて鶯がホーホケ經と啼て居りまする處でたい盆槍として花の下で團子を噛めて居た處が色氣のない話しなり又面白味も何にもない譯で其面白味をつけるのは是非酒に限るで御座います又又兩國の川中舟を泛べて納涼する時でも灘の川にて紅葉を観る時でもたい番茶を呑て澁い面をして居る處が可笑くもない譯でその面白味を添るにいせツヒお酒でなければなりません(ヒヤ)また鴛鴦樓上にてチンカモの小鍋立て夫婦氣取の差向ひは宜しむが此時お酒が無ければ痴話や口説の種もなく雪巴も紀伊の國も口先へ出て來ませんで誠に陰氣な事で御座います又八熊れん中が拳固をふり回した末サア仲裁中直りだどパチ／＼と手を拍とぎに酒が無ければ矢張り笑つて別れる機會がありません(ヒヤ)又たかさこや此浦船に帆とあけてト胴魔聲を出して謠うをキツカケに夫婦僧老の祝ひををるも酒なければ何だか間が

扱て居て目出度こゝろ持が致しますまい其他小供の誕生日と云ひ老人の
 年賀と云ひ忘年会と云ひ親陸會と云ひ新年宴會と云ひ何と云ひ蚊と云ひ
 凡そ興を催し喜を表する時に第一何は無とも酒で御座います故に藝者
 も酒の爲めに纏頭をべこみ女郎も酒の爲にお客を釣り込め肴間も酒の爲
 にごまかし髯公も酒のため鼻毛をのべし又待合でも船宿でも日本料理
 屋でも西洋料理でも芝居茶居でも引手茶屋でも宇治の里でも天麩羅屋で
 も鶏肉屋でも蕎麥屋でも牛肉屋でも皆酒のために利益を占めるの實に
 些細の事での御座いませぬ諺も女房を質に置ても朝酒の止られぬと云ひ
 ますが成程さけ飲の身にあつて見るとさうかも知れませぬ(ヒヤ)斯様
 も申し述ますれば世の中酒は結構な物ない様で御座いますすが何に
 限らず一利あれば一害ありとか申して酒も亦その通りで事およると大變
 な害を生ずる事が御座います昔し儀仗とか云ふ人が酒を造つて馬と云ふ
 人に飲しました時に馬がそれを飲で云ひまするよ是の滅法界うまる物酒

が此酒があるぞ後世も爲で國を亡す者が出来るであらうと取越苦勞をし
 たさうで御座います又唐人の小言に戒む汝が酒を嗜む勿れ狂藥おして佳
 味も非ず杯も大層酒をわらく云つた事もありませんが成程あれも一理ある
 事で御座います如何とならば彼の裏店社會がすりこ木すり鉢の大立廻り
 をやつて隣り近所の厄介となるは多く酒うら生ずる害で御座いますまた
 大切の息子ののが藝妓にはまり込で親を困らせるのも酒から始まり大
 道で高聲に都々一トツナリトノと諺ひ巡査さんの御厄介となるも酒の爲
 で御座いますせう又ふだんの猫の様を親父でも酒を飲と鬼の様を勢ひもあ
 つて女房を張こくるやら小供を蹴とばすやらドエライ騒ぎをおツ始める
 のも酒の爲で御座いますすが一体全体さけを飲と面の皮が千枚張に厚くな
 つて耻を耻とも思はず外聞の悪い事も外聞わるいと思はず外聞も屁痴魔
 もなくなつてお負に大切お用向も忘れてまま貴重な時間を無益につぶ
 し人の愛ひを憂ひと思はず自分の悲みを悲しともせず其中でも甚敷やつ

の葬式の歸途も芳原へもぐり込め法事の歸路に根津へ飛込め杯いたす者も御座います。がこれ皆酒のわざで御座います。して決して其人がわるい譯では御座います。まい(ヒヤ)く(其)うへ酒と云ふもの人をして怒らしめ人をして笑ひしめ人をして泣しめ人をして踊らしめ人をして悪口を敲かしめ人をして別嬪を口説て劍突を喰ひしめ人をして免の字を頂戴せしめ人をして御店を思苦尻しめる等するふん其害も澤山御座います。然て見ると酒の飲ぬがム、酒さへ飲なければ心の狂う氣遣ひもなし心が狂ひあければ免の字も頂戴せず御店も思苦じらす何事も安全息災だと申せ何でも酒を飲ぬが上分別の様に御座います。そか底かッレ胃頭に申した酒の飲へし飲べからずで御座います。して酒を飲て面白く保養するより宜しいが酒を飲て喧嘩口論を始め亂暴する位あらぬ酒の飲ぬ方が宜ろしい之を早く云へ唯酒の量りなし亂に及ばずア同じ酒を飲ならば皆さん此言を守つて飲てもらい度もので御座います。(喝采)

○儘にならぬ浮世

儘もあらぬが浮世のならいト能く人の言ふ事て御座います。して此儘にならぬト我心に思ふ通りに行かぬ自分の考への通りにならぬト云ふ譯で御座います。が成程な事でも自分の見込とウリには行ないもので御座います。尤も何事も自分の見込とほりに爲たならば夫ころ大變て御座います。せうなせ大變かと申す。我々人間の皮をかぶつて居るもの誰しも慾の無い者のなく又色氣のない者の有ませんから先づ第一番に骨皮道人あどは一寸金がほしいと思つと直様銀行へかけ付け彼の別嬪と寐て見たいと思ふと直様の別嬪を自分の内へ引摺あむと云ふ様に遭たいですが左右なると先方で儘になると云ふ權利が有ります。から先方の思ひ存分に返答されると銀行の方でも金を貸の嫌だど云ひ別嬪の方で氣障を奴だぬへ生好ないと臆邊をビヤンと一ツ毆れて見ると矢張り儘にあらぬ浮世とあきらめるより外はないと云ふ一件て御座います。そから此儘になら

ぬ浮世を儘になる浮世とするより先づ第一に人の心を同じ事平均して
 此方で思う事の彼方でも其通り又思つて居てお互に氣を揃へて鑿と云へ
 ば龜ヂヤと云へバ火事と云ふ様に氣を利して貰はなければ儘になる浮
 世どの爲ません(ヒヤ)併し其様も無理な事を云つたからとて迎も出
 ない相談で矢張り儘にあらぬが浮世のならひと思ひ切て仕舞より外に手
 段のない譯では御座いますか何に致せ儘ならぬに困るで御座います
 んか(ヒヤ)いま其儘ならぬ大略を申し述べてこれ人間と云ふ者の二
 本の手あり別嬪の袖を引べし二本の足あり女郎買お行べし口あり恍惚を
 吐べし耳あり三味線と聞べしト云へバ大うう調法な様で御座います
 しい事には羽翼がありませんから借金取が遣て来ても飛べ逃る事が出
 来ません是れ儘ならぬ一ツで御座います又貧乏に子あり山柿に核實わ
 りとか申しまして其日ぐらして碌々喰ふことも出来ぬ所謂あさ粥ひる
 扱はん雑炊と云ふ様な喰や喰の貧乏人になり又出来たまた出来たと矢

さら無性に餓鬼が飛出しドウカ一人の子がほしい何故出来たのだらう
 縦令女でも宜にと子育の地藏を信心したり水天宮へ祈願する金持に三
 年たつても五年待ても子供がないと云ふは是れまた儘ならぬ浮世で御座
 いませう(ヒヤ)藝者がお客のない時や娼妓がお茶を挽て居る夜な昼に
 疊ぎんをすれば丸ではづれ辻占を買バ文句が悪るし二日も三日もお茶の
 挽つかけかと思へバお客のある時ドカ一所に來て口が掛つても半
 分は斷り又まはしが取されぬ事あり此とき藝妓の思ふお客の融道に附ぬ
 晩二人か三人づゝ來て呉れバ宜にと思つた處がさう旨くお客の融道に附ぬ
 のが亦これ儘ならぬ浮世で御座います又四方八面をしを搦木にして駈す
 り廻り途中で午砲を聞いて腹が減たから懇意先で一杯馳走にならうと其家
 へ行て見ると生憎ひるめしを仕舞た處でお負に飯がないと是れまた儘
 ならぬ一ツで御座います(ヒヤ)また賣なくても宜い大店よりドン／＼
 客足がとまり如何かして店の品が賣たいと云ふ小商人にの客がないと

の亦これ儘ならぬ浮世で御座いませう又蝶よ花よと手の寝て生育し一人
 ツ子の生憎病身で面付を見れば幽霊の如く彼の馬鹿の早く死ねば宜と思
 ふ様な者の却てピン／＼して居るとは是また儘ならぬ浮世で御座いませ
 う(ヒヤ／＼)また彼の別嬪の愛嬌ものだわアいふ女が女房に持て見たいト
 いろ／＼口説てもヒヤを喰ひ彼の女の見てもツツトすると思ふ奴の先方
 からお膳を据るといふ是れまた儘ならぬ浮世で御座いませう(喝采)其外ま
 ならぬ事を十把一束お申しますれば金のある者の理非を辨せず國益を計
 る者おの金なく美人は薄命多く才子の肺病よか、り刺身の腐りやすく乾
 魚の何時までも残り惜む人の早く死し憎まれ者の長命し〇〇に爲らうと
 思へば手蔓あく折角てづるが有て〇〇となれば地震でゆり落される等ま
 まならぬ事ばかりで御座いますナント諸君これを儘にする工夫のあり
 ますまい歎(喝采)

○月と籠との説

道人が以上に饒舌ました諸説の餘り可笑もなく面白くも御座いませんか
 ら一寸合の手にて月と籠と云ふ根も葉もなく海にも藥ももあらぬ事を一席
 辨してお笑ひ草と致しませうさて月と籠と申す事物の大變お相違した
 ことと云ふ言葉で御座いますから今うの大變に相違した物をノベツは饒
 舌ませう海の廣さと川の狭さを較ぶれば月と籠なり火事の騒ぎと御祭
 りの騒ぎとを較ぶれば月と籠なり湯屋の木拾ひと新聞屋の種拾ひとを較
 ぶれば月と籠なり藝者の柳腰と乳母の臼尻とを較ぶれば月と籠なり演説
 家と講釋師とを較ぶれば月と籠なり落語家とテロレン祭文とを較ぶれば
 月と籠なり奥様の様子とお三の出立とを較ぶれば月と籠なり旦那の体裁
 と權助の風俗とを較ぶれば月と籠なり番頭の支度と小僧の身作と較ぶれ
 ば月と籠なり相撲と蜘蛛と較ぶれば月と籠なり天狗とお龜とを較ぶれば
 月と籠なり蒸菓子と焼芋と較ぶれば月と籠なり金米糖と煮んごう豆と較
 ぶれば月と籠なり白紙と塵紙とを較ぶれば月と籠なりなままと銀とを較

ふれば月と籠なり眞鍮と金とを較ぶれば月と籠なり味噌と糞とを較ぶれば月と籠なり午砲と屁とを較ぶれば月と籠なり帽子と烏帽子とを較ぶれば月と籠なり人力車と蒸氣車とを較ぶれば月と籠なり絹と木綿とを較ぶれば月と籠なり黒太陽と佐倉炭とを較ぶれば月と籠なり靴と足駄とを較ぶれば月と籠なりシンプと電気燈とを較ぶれば月と籠なり筆とペンとを較ぶれば月と籠なり日傘と蝙蝠傘とを較ぶれば月と籠なり横文字と漢字とを較ぶれば月と籠なり日本服と西洋服とを較ぶれば月と籠なり麻上下と大禮服とを較ぶれば月と籠なり合羽と外套とを較ぶれば月と籠なり煉化造りの家と茅ぶき屋根とを較ぶれば月と籠なり驛公と書生とを較ぶれば月と籠なりいくさ人と色男とを較ぶれば月と籠なり開化人と頑固親父とを較ぶれば月と籠なり梅曆と三國志とを較ぶれば月と籠なり馬と鹿とを較ぶれば月と籠なり東京と田舎とを較ぶれば月と籠なり官權主義

と民權黨とを較ぶれば月と籠なりト何時まで饒舌ても切のない月と籠ですが諸君この月と籠の中で撰どり見どりで御身の爲にある宜ことを引固ぬいて悪いと思ひれるもの捨て下さる(ロヤ〜)

○競争の説

近頃の競争と云ふ事が流行で御座いまして難でも艱でも競争でなければ夜も日も明ぬと云ふ妙な流行ことで御座います。此競争と申すものヒヨんな事から始まるもので早く申せば意氣ばり附で據ころさく競争しあければならぬ場合にあるので御座いませうが互に負ず了節を出て威張た處がつまる處の共潰れて仕舞いに矢張り不景氣で困る〜と泣言を云ふばかりだらうと思ひますなれども我々の貧棒書生はこの競争で買物の安く出来食物の安く食ると云ふ時節で御座いますから餘程けつ構な流行ごと、思ひます(ロヤ〜)人によると競争の結構だ至極おもしろい早く品物が只よあれば宜なと、待て居る者もありまそが競争がいくら流行で

も品物を只くれる様もある氣遣ひのマサカにありませう然が随ぶん中に只も同様な物も御座いますして一寸ふんせしと一本かひも行ても手拭一筋を景物に出し三錢五厘の牛鍋を食に行ても鶏卵の二ツ三ツも景物に出す様な場合で御座いますから之を買たり食たりする者の大變な徳で御座ぬますが之を賣方での大變な損で御座いませう抑々斯様に競争が行だした原因を尋ねて見ますると三菱會社と共同運輸會社との競争が始まりて御座いましたして夫から猫も杓子も競争くと競争心を出して意氣張づくをおッぱじめたので御座いますすが今の中目に見へた競争を算へて見ますれば鐵道馬車が賃錢をさげればガタッリ馬車も賃錢を下げ八公の人力車の一里三錢で駈れば熊的の二錢の割合で客を引き甲の呉服店で手拭の景物を出せば乙の呉服屋での積鼻禪の景物を添へ一方にて一割引の品を賣ればまた一方での二割引の物を賣出し一人が倒様もん字の廣告で法螺をふけば又一人の横ッ倒し文字の廣告で天狗をならべ休暇なしの

新聞紙を出せば無遞送料の配達が始まり一方で員外獨り稽古の洋學生を寡れば一方では獨り案内の雜誌を摺出し一方に於てアーメンの因縁を説ば一方は於て南無阿彌陀佛の由來を説き一方に於て耶蘇退治の演説をすれば一方での暴言破碎の講釋とはじめ一軒の女郎屋で五代を下ければ又一軒でも安直又賣出し親父がお三どんに這へば息子は子守を口説き其他なは競争をひとまとめに致しまそれバ權妻の御新造様と競争し娼妓の藝者と競争し漢方醫者は西洋醫者と競争し船宿の待合と競争し日本料理の西洋料理と競争し酒屋の洋酒屋と競争し下駄屋の靴屋と競争し傘屋の蝙蝠傘屋と競争し洗湯の温せんと競争し漢學者の洋學者と競争し裏だなの山の神の大屋の神さんと競争し油屋は石炭油と競争し落語家の講釋師と競争し手代の番頭と競争しお三どんのお乳母さんと競争しえやも屋は鰻屋と競争しすし屋のえるあ屋と競争し蕎麥屋のてんぶら屋と競争し炭屋のたどん屋と競争し扇子屋の團扇屋と競争し私立學校の公立學校と競

争し墨屋のインキ屋と競争しかあのかのくまひのローマカイと競争し相撲は役者と競争し何の何と競争し彼の是と競争する等競争の種類は中々澤山御座ぬまするが斯様な競争は競争とは云へ河童の尻と同一事でもドナラがドウでも宜い譯で御座います若し國と國との競争でも始まつた時には夫れコソムんせしを堅くめて取り掛つて貰ひまた飽まで競争し飽まで張合て競争の勝利を得る様にして貰いたぬもので御座います(大喝采)

○細君に一言す

我々人間の父母あるの猶万物の天地あると同じ事で御坐いましてイクラ利功發明も人でも父母が無ければ生長も出出来ませす又イクラ奇麗な花の咲く草木でも天地が無ければ生育も出出来ませぬ故に万物の天地の氣候が宜しければ奇麗な花をひらき人間の父母の教訓が宜しければ利功も人が出出来ませす譯で御坐いますから人の父母と爲て居られる御方の平生にウカ／＼して居てのなりませぬ(ヒヤ／＼)ひかしの人の云ひましたに

は食物を飽まで食ひ着物をドツサリ着て身體を暖め一ツ所お盆鎗して居て教訓を仕なければ鳥や獸と同じ事だと申まされたが實は御尤も千万の戒めで御座いますナせなれば人間がイクラ子を産だから迎ふれを教へませんければ其子の目が有つても節穴をうせん口が有つても抜裏と同様で目に見ても一筆啓上も讀ず口が附て居ても時候の挨拶も出来ずたい飯を喰て生て居ると云ふ看板ばかりで決して上等の人間の出来ませぬ若し人間として飯を喰て生て居ると云ふ看板ばかりなれば彼の鴉のカア／＼猿のキヤツ／＼と些少も違つた事は御座いますまい然て見ると昔しの人々が教訓なければ鳥獸と同様だと申したのの決して出鱈目出放題での御座いませぬ
夫れ教なければ鳥獸に同様だと云ふ事の皆さん百も御承知である事は私も存じて居ります左様して皆さん之を御承知でありながら其教へを成されないので如何した譯で御さるませうか私の想像する又は愛に溺れ

て教を怠慢られる様に考へます左様して其愛に溺れるの男親か女親かと申しますれば男親より女親の方が其溺れ方のひどい様で御座るまゝ尤も焼野の雉子よるの鶴と申しまして誰しも我子の悪いもの御座いませんが唯愛におぼれて教訓を忘れ大切我子を鴉のカア〜猿のキヤツ〜と同様致しましては天道様へ對しても濟ない事で御座いませう泰西人の戒めに子供の善悪の母親の教訓の良否よよると申しました成程これの金言で御座いますナゼ金言かと申しますると凡そ人と云ふものはオギヤアと生れてから東西南北を知るまでの其子が母親を慕ふの丁度磁石と鉄の間からの様で御座いますから此圖を外さず母親がツツカリして其子を教へますれば其子の何様にも善なりますものを其時分よ何でも箇でもその子の云ひあり次第が儘いつに育て置ながら其子が生長すると男の放蕩とあり女の尻軽とあり或の亂暴して父母の手に治まらず或の駈落して行衛が知れぬ杯と云ふ事が出来するも父母の眼玉をまる

くして彼の馬鹿治郎め彼のお轉婆阿魔めよく人を困却やアがる急に火の様にあつて怒る人が間々御座います斯様道樂者になり尻軽阿魔もありましたの誰がしたので御座いませう即ち親の育てが悪から起つた事で取も直さず親が道樂や尻軽を教へたも同様で御座います(ヒヤ〜)且つまた細君の務めと云ふものの中六ヶ敷もので第一經濟法を考へませんければ身代が潰れて仕まひ教育を爲されば我子が馬鹿にあり針仕事が出来なければ着物を着まどが出来ずお客の待遇たを知らなければ悪口を云いれ其ほか万事について氣轉を利さなければ細君の細君たる機能が御座いません然るに日本婦人の習慣として經濟の無茶なり教育のお構ひなく針仕事に打捨て置いて先づ三味線や踊をやらひ飯炊と云へば唯米と煮て食うと云ふまでにて養生法などには頓着せず奉公人を使うと云へば畜生でも追使ふ如くお客が来たから逆しお茶一杯で誤茶まかすと云ふ有様で御座いませ(ヒヤ〜)去りながら經濟法や針仕事の無茶流儀の姑く措て

彼の子供の教育の無茶苦茶の實にこまつたもので御座いますから少しく小理屈を申し述べれば成ません世間の細君達ヨ生意氣を云ふ奴だと思召さずに聽て下さる謹聴く道人の友人某と云ふ者が御座いまして此男の平生に子供を愛しました教育法も少しの心得て居るもので御座います。それが彼の虎列刺病の流行とき細君に云付て申しますに虎列刺病は食物の不注意から起ると云ふ事だから未熟の菓物や消化の悪い物を子供に遣たり食したりしていなりませんツと堅く細君に斷つて置ました然る所。こどもも其様な事知りませんから動すれば人の食するのを見て羨敷おもひ母親も請求事が御座います。一日の事子供が外から歸つて参りまして「子」おツかささん眞桑瓜が食たい「母」眞桑瓜の毒だからお止「子」お隣の馬ヤンも食て居るヨお向ふの鹿ヤンも嚙つて居るヨ「母」そんな事を云ふと尊父に叱られるヨと一旦説諭しましても子供の事で御座いますから自分の食たい物が食ない處からワイく泣て居りますと母親のこれを可哀

想に思ひよんどある無く眞桑瓜を一箇やつて申しますよの尊父に見られぬ様に早く食てお仕舞と云つて子供の機嫌を取て居る處を道人が見受た事が御座います。此細君の仕方が宜で御座いませうか悪いで御座いませうか道人の思ひまするに縦令おどもが如何様泣うと叫ばふと初め毒だと云つて説諭した位なればイッラ子供が請求うども飽までこれを戒めて遣ぬが至當で御座いませう然るに子供が泣出すを見て可哀想におもひ劍呑なる不消化物を食せるのとならず尊父も見られない様に早く食てお仕舞どの口上を聞て見れば初めに毒だと戒めたるは子を愛するの心でいなく唯主人に義理立をしたと云ふ有様にて誠に大間違の仕方での御座いませんか「ヒヤ」慈母さん松公がまた敵視たアと泣て來れば母親の大きな聲を張上げて松公何だぬへ大きな身体をして竹坊をいじめでないヨ竹坊や此處へ來てお出で彼様馬鹿にお構ひでない松公の馬鹿やアイト言てお遣り松公に湯を掛てお遣と云へば竹坊の勢と得て湯を松公の頭に

かけ拳を握て松公の横腹を打てば松公の御免だくと逃る母親これを見
 て竹坊やモウ勘辨してお遣この騒ぎの洗湯にて度々見受る兄弟さわぎ
 で御座いますすが松公との竹坊の兄で歳十歳ばかりの悪戯さかり竹坊の
 まだ六歳ぐらゐの小兒で御座いますから母親が兄を戒めて弟を援けるの
 の素より人情の當然で有まざるおれども母親から言附て兄を馬鹿と云
 のしめお負に湯を頭から掛させる杯どの随分甚だしき間違で御座いませ
 う(ヒヤ)梅ナヤン最八時だよ早く仕度して學校へお出ヨと云へばお梅
 の夜具から首を出して慈母さんお腹が痛いから今日の休ましてお呉れナ
 と云へば母親の云ひますするに夫れヒヤアお休ミナ然がお稽古の休ませ
 ないヨと此お稽古との何かと云ひますると三味線や踊の事で御座いまそ
 扱この娘が腹が痛いから學校を休むと云ふ位ならばナセ三味線の稽古
 も休ませないので御座いませう是の母親がこの病氣は賸だと云ふ事を知
 て居ますから斯く申るので御座います併しお若しこの娘が三味線の

稽古を休むと云たならば夫コソ大變で直様ひすめの頭ハ癩だらけに成で
 御座いませう是また大間違の仕方での御座いませんか(ヒヤ)東京の人
 人の大抵かやうな譯で御座ゐまして女子を養育るに先づ何より第一番
 に三味線や踊を教へ手習や本を讀のドウデモ宜として居りますからサ
 ア其娘が成長するとか半長右衛門の眞似をするやらお駒才三の二の舞を
 やらかそやら飛んでも無い事ななり行ますと母親の急お臆を潰して異見し
 ても中々手も齒にもおへません然て斯様お浮氣ものに誰が仕立たか
 其原因を尋ねて見れば矢張り母親が教へた様なもので御座いまそ或人の
 云ひました言は娘は三味線や踊を習ひせる位ならば寧ろ按摩と習ひせた
 方が宜と申したそう御座います成程おれも一理ある様に思ひれおす
 何故なれば父母又の嫁入先きの舅姑が病氣のときに按摩なれば看護の助
 けは成りまするけれども三味線や踊での何の役にも立たぬから御座い
 ます(ヒヤ)右の外にマダ澤山申し上なければならぬ事が有ります

れども餘り悪口が過ると細君達に脹れ面をされると困りますから先づ此位で御仕舞に致しますが呉々も子供の育て方よの氣を附て下さいませ(大喝采)

○盆栽の改良を望む

近ぶるの改良と云ふ事が大流行で御座いまして難でも艱でもツレ改良ヤレ改良と改良しければ今までの品物の丸で役立ぬと云ふ様な譯にあつて参りましたが扱ふの改良を企てる人の説を聞かするに從來の日本服の左右の袋が附て居て上も下もメブくで働くに都合がとるいから此着物を改良して西洋風の筒ッぽ袖と筒ッぽ足にするが宜と云ひまた從來の食物の米や麥の飯でお負に菜と云へば大根や胡蘿蔔や或ひの乾魚をを焼で食て居るのだから些ども旨くなく旨くない位だから身体の肥料も成ないから此食物を改良して西洋風の牛肉や鶏卵や鳥の様な旨い物にして身体に精分を附る方が宜と云ひまた從來の日本家の木と土をあつめ

て造るから火事があると焼で仕舞かせが吹と打潰れ雨が降と家根から水が落ちるしお負と空氣の出入が悪いから此家を改良して西洋風の煉化石とペンキで造れば火事は焼る氣遣もあし雨風がイクラ強くても大丈夫で空氣の出入も宜から之よするに限ると云ひまた從來の婦人の頭髮は張子の鬘やカモシや笄やかんざしや色々な道具を遣つてお負にこの道具を衡よかけると目方が何百何十目あつて甚だ養生の爲にならぬから之を西洋風の無造作なグルく巻の束髪も改良すれば油元結も張子の鬘も櫛も釵しも入らずの上からだの爲にも宜と云ひ(ヒヤ)まだ從來の日本の芝居は兎角いる氣の多い筋書みて勸善懲惡とは云ひながら却て浮氣と導くの弊害があるから之を改良して西洋風のいる氣なしで活潑ではんどうの勸善懲惡も洗濯すると宜と云ひ或ひは何も彼れては行ぬから斯すると宜わるひは之もこの通りではダメだから堂すると宜と色々御心切も心配して下さるから遠からぬ中よは權助も洋服を着て風呂の下を燃しつけお三も

洋服を着て米を磨ぎ我々の貧乏書生も煉化造りの家に入り椅子も腰かけ
 て旨い西洋料理を食う事も出来た辨慶と小町が夫婦になつて尻軽の娘
 に異見し孔明とナポレオンが一致して色男の道楽と説諭すると云ふ改良
 芝居も観ることが出来るのは實に御同様さまに結構な時節も生れたでは御
 座いませんか(大喝采)さて斯様に改良の流行時節で御座いますから道人も
 何があつ考へて改良の發起人になりたいものだと存じ七日七ばん寐目
 もねずに考へてヤツト思ひ附ましたの即ち盆栽の改良で御座います(謹
 聴)抑々盆栽と申しまゐる物の風流に世渡りをする人の斬弄物で御
 座いまして其栽である草木を見ますると梅櫻桃李やら松竹海棠また蘭
 菊木蓮の類ひで御座いまして彼の水天宮の縁日や地藏様の縁日などに法
 螺を吹て賣て居るものも皆同じ品物でたゞその品物も上等と下等との差
 別があるばかりで御座います道人のこの盆栽を見る度にはなはだ可笑
 く思ふ事がありますンナ何が可笑かと云ふと彼の盆栽の樹も限つて無暗

ま素直な木を無理にヒソ曲で不具物にしてあるからで御座います(ヒソ)く
 いま其盆栽のありさまを一寸見ますると上へ伸やうとする枝を縛つて下
 へ下げ横へ出やうとする枝を曲で上へ仰ぬくせ或ハ頭をナツ切り或は根
 を結び或ハ老木の芽を切て若木を接足し或ハ白い花の咲く樹も紅の咲く
 樹をクツつけ或は梨と林檎を一所にする等のものが御座いまして之を好
 む人の大金を出してこの不具物を買ひ大切らしく床の間に飾り置き又ハ
 庭前に並べて慰さんで居りますすが堂いふ了簡でこの不具物を床の間に飾
 り庭前に並べて珍重するの些ども了解ません(ヒヤ)く尤も珍らしい物
 を好む人の情で御座います事ハ彼の洋犬の芝居と見て笑ひ蜘蛛男の踊
 りを見て喜ぶ有様を見ても知れて居りまするが此洋犬だからとて外並は
 づれて足を五本つけた譯でもあし洋犬の矢張り洋犬でたゞ珍らしいのハ
 人間のすべき藝をするると云ふまで彼の盆栽の木の様も無いものを附
 け有ものを切てこしらへた物でハ御座いません又くも男とても別段に目

が四ッあり鼻が二ッあると云ふ譯でいなく矢張り人間は人間で御座るま
 して唯手足が長くて頭が大きく胴中が短くと云ふまで彼の盆栽の木
 の様も手と切て足へつけ目を取て懸へつけた様なこしらへ物で御座い
 ません故に是れ等の先づ珍らしいものと云つても敢て差支は御座るま
 さいが何程めづらしい物が宜とて盆栽の様に枝の無い所へ枝をつけ上
 伸る物を下へ下げ横も出るものを曲て上へ仰ぬかせ梅と櫻と合併し花を
 開く様な馬鹿氣たる不具物を珍重するとは實に開化の世に對して餘り感
 心した話しでの御座いますまい況て無情の草木でも持て生れた性と云ふ
 ものもあり又發育の時節もあるもので御座います然るに此天性も發育
 の時節も構はず未だ花の咲く時節も来ないのに無理に花を開かしめ自
 分は真直に伸んとするものを横合より之を曲る等の誠可哀想なものに
 て若し草木が口を利たならば常に不平を鳴し植木屋と風流人を相手とつ
 て嘲諷を起すかも知れぬと云ふ(トヤウ)古語も曰く鴨の足短かすと云へど

も之も接足をすれば憂うべし鶴の嘴長くと云へど之を女を切らば悲し
 むと云ふらうとこの語の餘程うなる言葉で御座いますして盆栽の辨護人が出た
 ならば必ずこの文句を擔ぎ出すで御座います(トヤウ)よつて道人が盆
 栽の改良を望みますのは外に仔細も何にも御座いません唯めづらしい物
 を好む人の斯様な人造物の梨の木へ梅の生やうな物を愛せずして天然の
 奇物と愛し又盆栽と愛するならば梅の梅さくら櫻の持前に培養て真直
 み立つ枝の真直に立たせ横に出る枝の横に出して唯その天性を曲す發育
 を妨げない様にして翫弄物にして賞ひたいと申すので御座います此改
 良説に賛成の方の御座いますまいか(喝采)

○詰りせうする乎

この詰りせうする乎ト云ふ言葉の世間の人々が能く云ふ言葉で御座いま
 して例へば彼の男は毎日ブツブツ遊で居て詰りせうする乎彼の女の最早
 三十近いに未だ片附ないが詰りせうする乎の類にて何事でも量簡も窮し

始末に困れば詰りせうする乎の言葉を出します元來この言葉の縁氣の
 悪い言葉で御幣擔の人にはト不適當の言葉で御座いますなれども何程
 御幣かつぎの人でも覺へず此言葉を發して詰りせうする乎と心配する事
 も御座るます殊に道人なせの面付に似合ない苦勞せうで御座いますから
 毎日く何につけ蚊にゆけ詰りせうする乎と心配ばかりして居りま
 す(謹 勝く)いま道人が心配する所の詰りせうする乎を擧て見ますれば市
 中の景氣は何商賣でも振はぬ様子にて絶て息を吹き回す摸樣も見へない
 が之の詰りせうする乎と思ひ米價が減法よ安くあつて百姓の租税を納め
 るに困ると聞てこれの詰りせうする乎と思ひ昔し其方貴樣で威張りに威
 張た士族さんも十八の八九人でん公債を賣り盡し商賣するよの資本が
 かし金を借るにの抵當もあし唯餓鬼の仲間入をするの外なき有様なれど
 之を救ふにの手段もあし救はなければ何様な不買心を出す歟も知れぬと
 聞て此と多振ひ法の詰りせうする乎と思ひ條約の改正未だ蓋が明ぬ處か

ら赤鬚先生の何となく治外法權を持ひて我儘を働く搦梅と聞てこれの詰
 りせうする乎と思ふ惡漢が追く殖ておひく多く法律は嚴しけれども
 防遏されず警察も綿密あれども殘らず捕縛の出來ぬと聞てこれの詰りと
 うする乎と思ひ今年存外の豊年で何でも豊熟しさい物の無から道理を
 推バ人民の大喜びで泰平を語ふ筈なるに何處の加減か到る處わを息を
 吹いて居ると聞て詰りせうする乎と思ひ義理も人情も何處へか飛で仕ま
 い狡猾ものど慾張者がだんく殖て息子が親父を相手とつて裁判所へ飛
 出し山の神が宿六を被告にとつて警察へ出掛ると聞て此人情風俗は詰り
 どうする乎と思ひ貿易振の輸出の月々に減じ養蠶を業とする者の頻に
 業を勵めども蠶絲の年々に安くあり得るところ其費す所を償ふに足らず
 その他輸出に係るもの大抵うんが多くて儲けが少なく工業のこれが爲
 めに衰へ骨かり損の草臥まうけと聞てあれの詰りせうする乎と思ひ骨を
 折ないで錢儲をするもの花柳の右よ出るもの少あし故よ一寸面附のよ

い者の争ふて花柳の地に入り新橋やあき橋又美人寄り集り何と胡麻化
 子て花を咲せやうと思へども世間の不景氣に釣こまれ毎日まい晩お茶を
 ひく斗りと聞てこれも詰りどうも平と思ひ近年最もふるる者の代
 會にて法律書の二三枚を翻へせば皆代官となり一枚の舌を以て互利を
 釣んと欲す又ろの中に免許代官あり三百代官あり其かず五百羅漢の數よ
 り多きに至れどもろの割合に訴訟事件の多からずと聞き去の代官も詰
 りどうする乎と思ひ又代官に次で年々かずを増すものドクトル先生
 にてこのドクトルと爲るもの皆曰く醫者となれば飯の食そまない無
 と然れども醫者の數が若し病人の數より多きに至らば飯を食ふよるか
 粥も噉れないたらうと聞ておれも詰りどうする乎と思ひまた此節一あめ
 毎に増加するの小説家にて少しく筆の先の利もの第何回くと貸本の
 焼直しをして飯を食て居れどもおひく仲間がふるて小説家が多くなれ
 ば皆汁も吸あからうと聞てこれも詰りどうする乎と思ひ一々心配して居

れば詰りどうする乎サッパリ分らねども時世の太平にも拘らず詰りどう
 する乎の多くして此等の詰りどうする乎の詰りどうする乎の詰りどうす
 る手サッパリ分りませせん(大喝采)

○ 狹帯會

諸君よこの狹帯會の發起人は道人の親友なる杵屋粹史で御座いまするが
 此狹帯會の議論はよほど面白くてナール程名説だと存じますゆゑ其大略
 を翻譯して諸君に申しあげ且つ諸君の御賛成を願ひ度おもひまして茲
 に擔ぎ出した譯で御座います扱方今は學者識者の人々が考へにてかあ
 らわい或は羅馬字會或は舞踏會あるひは何會或は何會と云ふものを起さ
 れましたところ各賛成者が澤山御座いますして追々御盛大に趣く有様で御
 座います其最後に始りて方今おいゝ其實施の廣くあるのを見まする
 は東髪會で御座います(ロヤ)因て杵屋氏も随分又智恵者で御座います
 から我も一ツの會を起して世々噴々せられ一は世益を計り一は名譽を釣

ん者ぞと思つき終に三日三夜はらを絞て一の名案をこき出しましたのは
 即ち婦人の狭帯會で御座います(謹聴)或る日のこと友人某が参りまし
 たから先づ某に向つて論陣を開かんと思ひ例のエヘンと咳拂ひして申し
 ましたには方今日本婦人の衣裳中結髪はさておき帯より不經濟かつ
 邪魔物があるまい如何とならば上流社會の奥様御新造様に至ては我家に
 居るにも數十圓の品であければ結ばすまた花見遊山若くは御客に招かれ
 ると云ふ場合に至つては四五十圓より百圓位までの物でなければ仲間入
 りが出来ぬと云ふ話しにてお負に益も正月も一ツ帯ばかりと云ふ譯も行
 ぬとて或は博多が宜と云ひ或は西陣織が宜と云ひ或はこの形は華美で
 なくひ彼の何織は餘り地味すぎて老人染て可笑ひ杯と常よこれがため且
 那を苦ませる事そくならず又中等以下の婦人に至つても夫れくは贅
 澤をならへ或は宿六を口説き或は親父に請業と縮緬なり縞子なりみな身
 代不相當の品をみて初めて我は女ありと云ふ頭をして居れりさて邪魔物

の假と問ひ勿論云ふ迄もなく(三重言凡る目方に掛て見れば二三百目内
 外必有らうと思ふ物を婦人の(柳腰中)は白腰もわれど)又回し附け其結び
 あまりを尻より下げて居るから冬の日のまだ宜やうなもの、夏の暑と
 さた其厄介なる言べからず故に茲に狭帯會と云ふものを創起し社會一
 般の婦女をして男帯もしく小娘の帯ぐらぬの細帯を用ひしめ大層べ
 れ利な様に存するが如何と申したれば友人の姑く考へて成程君の名論も
 感心の感心したれども惜ひ哉思考未だ密ならず利と便に冥うして隨て生
 ずるの不經濟邪魔物あつて朝三暮四たるを免れざるを知らず今日に於て
 何會くと云ふ者を起すもの多くのこの弊を免かれず夫れ世が太平に趣
 き文明に至れば隨て贅澤に走るの免れ難きの弊あり故に邊鄙の國へ行
 同し日本の女なれども皆細帯にして男のへコ帯を止め之を縫て帯となさ
 ず(單)帯と云ふは假も今日東京人の如き帯と指すこれを縫て帯となせる
 土地の則ち前の土地に比較れば既又幾分か華奢文明も趣きたる証據あり

左れば婦人の帯今日の贅澤に至りし勢ひ自ら茲にいたりし者にてこれを此に防げば彼も別物の華奢を助くるものゝ出るゝ必然なりたよそ婦人の妊孕の任をねび臀の骨張て廣さが爲にお尻突出して甚だ不体裁なり是を以て帯の結び目さがりて之を蔽ひ其醜体をかくす(ヒヤ)く西洋の婦人の潤き袴を穿ゆるも其醜体を顯はさず然るも日本婦人として帯のたれ目なくば醜体を顯はして甚だ不体裁なるゝ今日妓樓の新造東京のが巻き帯なるを見ても知るべし此を厭ふが故に世の太平に趣くに随つて人も華奢となり終にまの結び目をさげ醜体を隠せしにて云ハ一ツの新發明にして出鱈目の譯ではあい故に一旦狹帯會も入て此に帯と狭くするも終に尻の不体裁と感じて彼れに袴か又ハ尻かけにても作り出して之にまた金錢を費し狹帯の以前と朝三暮四たるを免かざるべし左れば世の華奢と云ふものを取り除く爲めに第一もまづ節儉會と云ふ者にて起し節儉會となれて後第二者に狹帯會を起す様は仕なければ何の骨折甲斐もあらず

い猶また狹帯會が起つたならば次で穿袖會も起さなければあるまい斯くすれば寧ろ婦人服を改良して西洋婦人服もしたら宜からうと云ふ説も亦湧出せし左様なつて來ると經濟の足しにも何れもならずして其便不便も何程の違ひもあらざるべし然て見れば節儉會の行なれて後のイヤ知らず直も狹帯會と起さんとするも矢張り朝三暮四も換るの君の無位無祿一介の風來人あれば君が何程狹帯論を嘲るも恐らくの賛成者あかるべし併しあがら世間には随ふん好事家も多ければ或ハ立派をお方ぐが太平無事に乗つて今度の狹帯會穿袖會の番なり杯と云ひて熱に浮され出す人なしとも保証し難し故に茲に一言し置あり抑々事云ふ可くして行ふべからざる者あり世の風潮につれて既に一旦華奢の度も達したる上いあの華奢を除いて後でなければ縦ひ一方に止むるも一方も發する猶かせの陸に吹かざれば海にふくが如しいま下等社會の山の神を見れば既に狹帯とまるか細紐にて腰をまはる者澤山あり但し世の様々なり羅馬字會盛んに

して數年立たぬ中世の羅馬字となるかと思へば康熙字典の出版もあり詩文に勉強する人もあり君いま狹帶會を起すの暇あらば何ぞ節儉會を起すの先なるを察せざるやと漢語まじりにて素敵もない駁論を食ひ狹帶會を起すの張合も拔ましたが諸君よく杵屋氏の援兵となりて一理屈を附て下さるか狙しの駄目で御坐るか(大喝采)

○丁稚小僧の忠告す

川柳子曰く親のすね噛る息子の齒のしろさと諸君よ川柳師と云ふものナンド旨い事を云ふもので御坐いませんか是の彼の大店またの金持の息子が毎日何事もせず唯ラくとして日を送り一生懸命に親の膝に噛りついて居て沈香もたかす屁もひらすと云ふ意思痴なしの事と云つたの御坐いますか扱をど一疋又生れ十八並の身体を持ち十八並に二箇の翠玉もゆりあがら何事もせずして何時までも親父の膝に噛り附て居る沈香もたかす屁もひらすの意思痴なしの逆も人間仲間へ勘定す

る事の出来ません夫故諺に可愛い子よの旅をさせと云ふ戒めが御坐います此戒めの諺が云た言で御坐いますか存じませんが可愛い子よ旅をさせと云ふ言は餘程ふかい意味のある言で何人でも此言を守てさへ居れば決して遣損ないの御座りません何故かと申すに唯だ我子が可愛いくとして何時までも親の膝元へ置て甘く育た日々に前條に申した意思痴なしの人間が出来て世間の交際方も知らず自分が苦勞をしますから人の苦勞も察する事が出来ずして到底どころは親もこまり自分も困る譯で御座いまするから我子が可愛ければ何でも他人のめしを喰せ他人又交際して辛苦おもひをさせねば行ません故に東京の人達に此にお氣が附れ男の子で十一二歳よなると丁稚奉公に出されますがこれの至極よい事と存じます切りの男の子と丁稚奉公にだすの至極結構で御座います肝心な御當人がツカサなければ折角の親の心配が何の役も立たせんから茲に此演説をして小僧さん達に一寸忠告する譯で御座います(謹聽)夫れ親の目か

ら我子を見まされば誰しも馬鹿との思ひません馬鹿と思ひなければキツ
 丁 伶俐と思つて居るで御座いませう之を親の慾目と申します例へば茲に
 跛脚の娘が御座りまして他人の目から見れば堂しても跛脚に相違ないが
 若し人ありて御前さんの娘のチンハだど云たあらば其親の怒つてチンハ
 でも餘計な御世話だ彼れ一本の足が長いばかりで決して跛脚で御座
 いませんと申すて御座りませう又近眼の息子が御座いまして他人の目か
 ら見れば堂しても近眼又相違ないが若し人ありて御前さんの息子の近眼
 だど云ばい其親のムツとして近眼でも餘計な御世話だ彼れは何を見るよ
 も丁寧に見るのが生れ附で御座いますと辨護するで御座いませう是れ親
 の慾目で御座いまして又我子に溺れるよと總て斯様な理屈で御座います
 玉藻前三たんに目に焼野の雉子よるの鶴子をおもはぬ無きと知ると鬼の
 様な金藤次も子の爲めに勇氣を失ひ忠臣藏の九段目に表に聞ゆる虚無
 僧の尺八つるの眞鏡が鳥類でもへ子を思ふと流石のとなせも我娘の爲に

の殆んど狂人の様にありました其外松王丸の小太郎に於る政岡の千松に
 於る皆我子の爲の身も世もぼられぬ苦勞もし悲しきも仕て居りますナ
 ント小僧さんよ親と云ふもの實にありがたい者で有ませんか扱わが
 親が斯様に心配や苦勞して育てゝ呉れて猶その上に他人の手掛世間
 の交際方やら商賣向やらを覺へさせ立派な人間に仕様と思つて奉公に出
 して呉ましたので御座いますから小僧さん達も其恩を忘れず亦よく親の
 心中を察して相當の義務を盡さなければならず又相當の恩返しをせねば
 なりません左様してゐるの義務をつくし其の恩返しをするの唯奉公先の
 辛抱と是より先の心掛とにある斗で御座います然るに道人が常に諸商家
 の丁稚小僧の振舞を見まするよ十人が九人までは親の心中も察せず恩が
 へしの様子も見へず大抵の夢我夢中で悪戯ばかりして居る様で御座いま
 すから茲又十箇條の文句を並べて丁稚小僧諸君に忠告いたします
 第一 お三どんを相手よして口論を爲す勿れ縦ひ其口論に勝利を得る

も食事に於て異趣返しを食ふ事あり

第二 番頭さんの短所と饒舌り又の傍輩の者と喧嘩つかみ合等を爲す可からず

第三 目上を目上との談話の處へ横合より餘計な差出ぐちをして屁茶苦茶に饒舌るべからず

第四 品物を賣たるとき其錢を錢箱に入れる真似して我袂の底へクスル可からず

第五 旦那またの番頭さんの權妻と知て居ても知らぬ顔をして居て叨りにお上さんに饒舌るべからず

第六 大道でドッコイ〜をして居るものが有つても之を覗きこみ又の手を出し或の大道講釋デロレン祭文等と聞べからず

第七 旦那又の番頭さんの云附めて使ふ出たる途中にて野師の賣物を立見して肝心の用向を忘るべからず

第八 使に出たる途中にて頼まれもせぬ人力車の後押をまたり又の大聲を揚て荷車の掛聲へンサカホイの假色を遣うべからず

第九 人の尻馬に乗て井戸端會議に饒舌るべからず

第十 商ひの多忙い時の新聞紙を讀むべからず閑暇になつて何程でも讀べし但し滑稽獨演説の此限にあらす

右の十ヶ條をよく心お留て奉公すれば立身出世すること請合で御座います(大喝采)

○娼妓の現を抜すは野暮なり

凡るもの世界に生れて居るもの情慾のない者は御座いませぬ人として若し情慾がなければ木石も同じ事で御座いまして造物者の罪人と云ても宜くならぬ者で御座います(ヒヤ〜)諸君の彼の賣鳥が耦を逐て春花梢頭に囀るのは是れ情慾あればで御座いませう又かの麋鹿が配を覓めて紅葉樹下よ鳴のはこれ情慾あればで御座いませう夫れ鳥獸よして猶斯様に情

慾が御座いますれば況て人間で情慾のないものは有ますまい尤も武藏坊
 辨慶と小野の小町の此情慾が無かつたと云ひ傳へて已に川柳子も辨慶と
 小町は馬鹿だナア山神と穿ちましたが若し云ひ傳への通り辨慶小町に情
 慾がなかつたから即ちこれ造物者の罪人で御座いませう(ヒヤ／＼)去な
 がら情慾あるに任せて無やと矢鱈とこれを濫用すれば才子も馬鹿となり
 學者も凡人となりまゐる是の故に聖人の何につけ蚊につけ色を戒めて居
 ります或人が謂まするには聖人が色を戒めて見れば此いましめを堅く
 守つた辨慶や小町の行ひ聖人は近ひだらうト云つたさうですが是れ
 は大變な大間違ひで固苦勞しく云へば其一を知て其二を知らぬ言草で御
 座います何故とされば聖人はたゞ色を戒めた斗りで情慾を禁止した譯で
 御座いません其証據には堯舜でも孔子でも皆子供の有たのを考へても
 知れ切つた話して御座います道人が茲に此屁理屈論をかつぎ出そのもま
 た禁止主義でいふ唯情慾に沈溺のを責め且つろの情慾の程よく宜加減

よ酒でもらひたいと云ふ趣意で御座います例へば酒を飲ぬも無意氣なり
 去として毎日圖歩七に酔て居るのも困りますが底がソレ唯酒の量をし亂に
 及ばずの文句を持出す處で情慾に於ても亦れなじ事で辨慶小町の様でも
 餘り偏屈なり去として丹次郎や時次郎の様でも餘り感心できぬ譯で御座い
 まそから先づ偏屈でもなし助倍でもあしと云ふのを十人並の人とするよ
 り外の御座いません況て節酒會と云ふ者の出来ましがまだ節慾會と云
 ふもの出来ませんから此節慾會と云ふもの出来るまでは各自に自分
 で節慾をとするが宜からうと思ひます然るに若い方の方の節慾と云ふ事
 となさらないで無暗矢鱈と濫用せらる様で御座いますから御意見と申
 すにのわらねども一寸一言申し述べて御座いませう(謹聽／＼)さて情慾を
 縦まゝにする人々の大抵娼妓に現を披しました娼妓の家業の情慾を縦まゝ
 にせしめる專賣所で御座いますから外面如菩薩の手管にはまると木石な
 らぬ人間されば魂飛び神迷ふに至ります左様して魂飛び神まよふの場合

よありまると何も蚊も無茶苦茶とありて娼妓の手練手管も譯が分らなくありまして彼奴の僕にはれて居る彼奴は僕にござつて居る杯と自惚の上うへに自惚の上うへ塗ぬりをして雨の降のあめにボク／＼出掛でかけ風の吹ふのよ大タコラ遣やうてゆき光源氏ひかりげんじを氣取きとつて彼の毘わなにかゝる是れ尋常たんじょう普通の鼻下長びかちやうで御座ございます夫うれ僅わずかに娼妓しやうぎの爲ために魂たましひを奪うばはれ其心そのこころを迷まよひされ甚はなはだしきよ至いたつて日居ひる續つして珍々ちんちん鴨々かもかもの小鍋立こなべたてに洒落しやれ込こむ人もありますが如何いかも情慾じやうよくを濫らん用ようすればとて娼妓しやうぎに現まをぬかす程馬鹿ばかげた骨頂こつていの御座ございますすまい況まて居ゐ續つをする杯たまとい以もつての外ほかの事ことで御座ございます(ヒヤ／＼ノウ／＼)古人こじんの狂歌きやうかに曰いく上うへの晝中ひるちゆうはよる行き下げの泊とどる下々げげの下等げとうが居續ゐつををる「下道人げだうじんは實じつ際さいに於おて之これを知して居ゐりまそが居續ゐつは必かならず不粹ふそな事ことの御座ございますせん扱さ道人だうじんのこれより娼妓しやうぎも現まを扱さすの不可いかなるを論究ろんきゆうせんが爲ため一例いれいを擧あげて細こまかに辨わじませうエヘン或處あるところに助平すけへいと云いふ人が移うつりまして此助平このすけへい先生せんせいが或娼婦あるしやうぶよはまり込こで居ゐりまして雨の降ふる夜よも風かぜの夜よもノツ／＼出掛でかけて又常またつねも居ゐ

續つを仕して一月ひとつきの中に二十日はつか位くらゐの女郎屋ぢやうぢやうやに潜ひそり込こんで居ゐて何なんの事ことのあいな女郎ぢやうぢやう屋やへ同居どうぢゆうしたる如ごとくで御座ございます夫故それゆゑその敵娼あいかたも人情にんじやうとしてフル譯わけにも行ゆかず惚ほたどか腫はれたどか云いひまして此助平このすけへいが朝歸あさかへらうとそれバ敵娼あいかたこれを留とどめてモウ一日いちにちからだを妾あなにかしめて下くださいモウ一晚ひとばんからだを妾あなにかして下ください實じつがあるから左様さやうして下くださいナニ冗談じやうだんぢやない眞實まじつでモヨ杯たまと空涙そらなみだをまばして袖そでと牽袂ひきたもともそがり附つく處ところから助平すけへい先生せんせいもますます／＼夢中むちゆうにありまして彼の炮烙ぱうらくの刑けいの作りませんでも敵娼あいかたの言いふとあ何なんでも聞入きいれぬ事ことはないと云いふ様に鼻毛はなげを伸のして居ゐりました然しかるとろの敵娼あいかたの宜鳥いどりが掛かつたと内々なまくら喜よろこひ時候ときの替かる目めに必ずかならず請求せいきうて曰いはく移うつり替かへる時ときちかきお逼せまり皆新みなあたらしい着物きものが出来できたのに妾あなひとり未だ着物きものがない助平すけへい曰いはく万事ばんじおれの胸むねの中ちゆうもああるから心配しんぱするナ又また祭禮まつりの日ひも近ちかよれば必ずかならず請求せいきうて曰いはく指折さしやり敷敷へれば神祭かみまつりが目の前まへに移うつりますすが仲なごんや樓母ろうぼさんよ浴衣ゆかたの一枚まいづゝも遣やちければ妾あなの肩身かたみが狭せまい

が堂しませう助平曰く万事おれが承知して居るから心配するナ敵娼また曰く何日は此樓の煤掃なれば手拭と半天を染さして下さいナ助平曰くよし敵娼曰く實父が去のせつ病氣で寐て居る様子あれどもお金が無いらから薬を飲せる事が出来ないし去とて薬を飲さなければ死で仕舞かも知れないが堂とがして下さるト色々様々の手段を考へての金を吸取るさんだん斗りして居りましたあれども助平先生の夢中になつて居るから、さうか宜々オット夫も承知だと言うが儘に仕てやりまして其費す金の幾許だか知れませんが敵娼から之に酬ゆるの唯深更て二つ三つの菓子を持って来るか又時として一杯の酒か一皿の肴で御座いまして之を持って来た時に申しまするおはこの菓子何某を欺して持て来たので御座いまするおの酒の乙某のを横取して来たんですヨと左も信切らしく云へば助平先生は鼻の下を長くして以爲らく酒菓の旨きにあらす美人の貽ものなればなりト然るにこの酒や菓子何人の半かちり半飲の残り物か知れませ

んものを斯く珍重するとの實は馬鹿げた有様で御座います夫れ此の如くこの魔物に魅されて内を外よし外を内よし我家業を打捨て居りましたゆゑ身代が追々にへまになりて川柳子の所遣けい城の涙で藏の屋根がもろト云ふ様もありませんして如何する事も出来なくありましたから彼の娼妓に相談しました娼妓の素より金貸商賣でもなく又妓樓と教育所でもありませんから相談相手とある道理もなく唯お氣の毎さまくと云ふばかりでお負に愛想が附たト云はぬばかりの取扱ひにありまして彼の助平先生は漸く夢の醒たる如にて急に後悔し俄に四角張りになりましたが斯くなりまして六日の蒲十日の菊でイクラ悔んでも齒ざしりしても追附すトウく身代限りして泣寐入となりました右のお話しの實際の事で御座います娼妓に沈溺する人は大抵おの話しよ似よつて居ります娼妓に鼻の下を伸して折角利功に産れたものが丸で馬鹿になつて仕舞ます然るも中には金満家の息子さんでお金も澤山あり又智慧も澤山ある身で居るが

らこの娼妓に沈溺て鼻の下を長くし一身を誤る人も澤山御座います。が金
 もあり智恵もありて鬼に鉄棒の身の上おられ、猶さら學問を勉強して其智
 恵の光りを見せおければなりません。況て少年は一生中の春時でありま
 すれば、徒に都々逸や葉唄を謠ふて悠々歡々、月日を送つていなりませ
 い。是れ道人が深く心配する所で、御座います。斯く説き來らば、諸君の中
 道人に反對して將又云れんとす。此の如き屁理屈、瓜論の百も承知、二百も
 合点あり。道人餘計なお世話を止め、先づ我頭の蠅を拂ふべし。且つまた道人
 が口の先でペラ〜饒舌る様を譯し、い逆も行ざるものなり。況んや私衛的
 とと事か、いり天下はれての賣物おれば、鼻の下を締め、犢鼻褌を堅くめてか
 かれ、一度や二度ぐらゐる遊んだ處が、差支もあかるべし。トなる程、この御説
 も一理ある様おれども、其一度ぐらゐるは宜らう。二度ぐらゐるは宜からう。が失
 策の元になり、ます。因てこの御説に對し、最一ツお話し致しませう。昔し
 人の獵夫が狸々を捕たいと思ひ、色々かんがへました。が狸々の中々、利功で

御座います。から殆んど其工夫に困つて居りました。が不圖策略を考へ出し
 て、酒を瓶に入れて海邊に置きました。然ると狸々は酒を好む者で、御座います。
 から酒の香を嗅いで、酒の傍へ來る。來ました。が狸々の思ふに、是れは自己
 を捕つるに違ひないから、迂濶にこの酒の飲れないと心に承知して、居
 りながら酒の近所にマゴ〜して考へて居りました。けれども何時まで立
 ても人が來ないから、又狸々の思ふは、人の來ない中一杯ぐらゐの飲でも
 宜からうと考へ、柄杓を執て一杯飲で見ると、中々うまお然しながら、其中に
 人が來ると捕れるから、モウ止さうと柄杓を抛出して、見て居ても人の來る
 様子もない處から、又思ふに、モウ一杯ぐらゐの飲でも、差支なからうと云ふ
 了簡で、又一杯引かけた。が未だ人が來ないから、モウ一杯の宜からう。是でお
 仕舞ふ仕やうと思ひながら、ツイ〜瓶の酒を、残らず飲で、仕舞とサア醉が
 回つて來て、如何する事も出來ない様になつた。からエ、儘よドウなる者かと
 酒の瓶を枕にして、ゴロりと寝て居ると、彼の獵夫の、たたとニコ〜顔で遣

て来てトウく生捕れたと云ふ話しがあります右の女郎買も此狸々と
同じ事で一度ぐらゐは宜らうモウ一度で止さうと思ひながらツイ深海へ
はまり込んで彼の手管の畏に掛るもので御座いますから諸君も女郎買と
お止なさいと申す譯で御座いますせんが彼の手管にはまり込んで現を扱
す様お野暮のあさら無い様にして貰い度と一寸御忠告申しあげると御
座いますへい御退屈さま(大喝采)

○鶏と孔雀と孰れの優る

前段に申し演ましたの馬鹿しく長文句で定めし御退屈で御座います
したらうから今度の極手短かに一席辨じませう扱孔雀と宜ふ鳥のチヤイ
十國即ち毛唐人國の鳥で御座いますして日本での見世物か何かであければ
容易に見る事の出来ませんから道人も委しい講釋の出来ませぬが彼の体
裁學者のお方々が筆筒などよさして居られる尾羽を見ましても孔雀と
申す鳥は大層に奇れないな立派な鳥と思われれますが其奇麗で立派な鳥であ

りながら此鳥に限つて斯様な藝がある斯云ふ智慧があると云ふ事はいま
だ聞た事が御座いません然て見ると此孔雀と云ふ奴は唯身體のあしらへ
方が美麗だ立派だと申す斗りて藝もあく智慧も無ければ能く人の云ふコ
ケおどかしの鳥で敢て珍重す可き鳥での御座いますをまい之に引替て皆さ
んも御承知の鶏と申す鳥の孔雀に比較て見ますれば乞食と銀行と親方は
と相違して身体も二王様と五百羅漢ほどの差別がありまするけれども鶏
の時を報知せる藝がありましたして經書にも鶏はじめて鳴て皆手をあらひ口
をそゝぎ杯と教訓の一端も成て居り且何れ鶏の人間の滋養物となる卵
を生産どうの機能が御座います故に道人の表面ばかりイクラ奇麗で立派
ても孔雀の決して譽ませぬ否はめあい斗りてなく身体は左程さきいて無
くとも智慧の優りて藝のある鶏を以て孔雀の上座と扱様と思ひますか詰
君の如何おぼしめしまと(大喝采)

○雪中の感

一室に閉籠つて長火鉢を中におき二人さし向ひて鳥鍋に湯豆腐ぐらび極
 手輕てアツサリと云ふこしらいて寒さを凌ぎ身体を暖めながら一寸三味
 線を執て雪の巴に降り繁るの爪弾を始めあるひの障子はそめに引明てア
 レ見やしやんせ此雪にの粹文句を小聲よ謠ふの彼の色男が雪中に居續を
 そるお樂まで御座いますヒヤ〜(櫻上に五六人が團樂坐り込で上戸の酒
 をのこ下戸の人の菓子を食べひ上戸と下戸の合の子の酒を飲あから菓子
 嚙り煙草を吹りし茶をのこ各自に思案して首を傾け腕組して考へ込と頻
 りにわが物と思へば輕し傘の雪の名吟なるを賞し或は富士の高根に雪の
 ふりつゝの非凡あるも感じ筆墨と首ッ引して雪の景色を愛するものは是
 れ雅客の風流會で御座いますヒヤ〜(家形船一艘に船頭二人を雇ひお客
 四五人に藝妓一組を連れケツトて身體をつゝみ酒で勢ひをつけ眼の邊り
 にポツト紅色を帯び未だお天氣に爲ざるに何の夕焼の感ひを生せしめ
 微聲て莞爾わらひながらアレ鳥が啼く鳥の名のみやあに名所があるわい

あアの實際を穿つて隅田川を溯るもの粹子連中の雪見船で御座います
 (ヒヤ〜)八力車一輛に挽夫二人をつけ一人の前とひき一人は後からかし
 其中に合乗り母衣かけ頬ツべた押ツつけど云ふ有様の長いお髯の寒風よ
 ふかれて武藏野の芒の如く束髪の雪吹を戴いて宛然風月堂の石衣菓子
 名の如くかれども寒さも厭はず上野に駈つけるもの彼の鼻下長先生が
 雪見を遊さるゝの御愉快で御座います(ヒヤ〜)夫れ雪の白し知れたこと
 天公が一たび此しろい雪を降せますれば東西南北どこでも彼所でも眞白
 にありまして丸で別世界の様に變つて仕舞ますが窮理學者にこの雪の體
 釋を聞かすると矢張り雨の水になつたので取て珍重すべき物で無いさ
 うで御座います然れども雨がどう云ふ氷理てか雪と化け變つて天の上か
 ら落ちて來ますると人々が大騒ぎして賞翫して道樂ものは居續して財布の
 底をたゞき風流人は之を詩歌俳諧に詠じ粹子連中は船を隅田川に泛べて
 餘計な散財を爲し鼻下長先生の風を引にも構はず權君と合乘て車を上野

に飛すもの抑く何故で御座いませう是れは外に仔細もあんも無い
 たい雪が降りますると外貌のボロを隠して辻雪隠も藏造り如くなり番太
 の家も煉化造りの様見へ枯木も花をつけ禿山も富士の山の様に化け變
 り何でも蚊でも外貌が奇麗にあるからで御座います夫れ外貌の奇麗なる
 を愛して内幕の醜容のを顧みかいは人情の常で御座いまして誠に據る
 ない次第どの申しあがら能くかへて見ると亦慨歎しい事てハ御座い
 ませんか(ヒヤ)ナせ慨歎しいかど云ふに外形ハ飾り易くして内幕は脩
 め難いもので御座いませが此おさめ難い内幕をおさめし者と飾り易い外
 形をかざりし者とを比較て見ますれば此外形を飾りし天麩羅物の方が兎
 角に勝利を得て内幕をよく脩めて居る者が負て居る氣味合で御座いませ
 (ヒヤ)くいま一例を擧て申しますあらば茲に二人ありまして其一人ハ黒
 羅紗の立派な洋服を着て金皮の時計を耀かし嚴然と構へこみ其一人ハ破
 れ着物を着て悄々として乞食の様な様子でありましたあらば其破れ着物

の方が洋服の人より智慧もあり學問もありましても十人が十人が洋
 服で立派な人を尊敬し破れ着物で乞食の様か人を輕蔑すること丁度且那
 と居候の如くで御座いませう是れ即ち枯木が雪を戴ひて花を着た様なる
 を愛し辻雪隠が雪のお蔭で藏造りの如く化て居ると賞すると同じ事
 御座います(ヒヤ)さて斯様ハ小理屈を附て見れば何でも理屈のつく者
 で御座いますが是れハ雪の悪い譯でハ無い之ハ賞観する人の了簡が違つ
 て居るので御座いませが元來ゆきと云ふものも此世界に無くてハならぬ
 場合も有まするし又むかしから雪の爲ハ名を遣した者も澤山御座います
 先づ雪中ハ草廬を尋ね雪夜に學問をした等の小八ヶ間しき事ハさて置て
 常盤御前の雪中ハ迷て源家を再興し深草の少將ハ雪中に凍へ死んで小町
 の無情を怨み浦里ハ雪の庭に繫がれて樓主の苛酷を歎じ袖萩ハ雪中に生
 家を尋ねてお庭ささの枝折戸に悲々孟宗ハ雪中ハたけのこを堀て廿四孝
 の仲間に入り赤穂の浪士ハ雪中ハ敵を討て忠臣義士の名を遺す等ハとな

雪のお蔭で御座いまして若し雪が赤くは是等の人の名を後世に遺すの機
會が御座いますまい況て雪の豊年の瑞祥だと云ひまをるから雪もまた世
界の道具で御座います(大喝采)

○自負の説

人少しく容体を作り少しく高く止る様子の者を見れば世人の一概に之を
打こなして彼奴の自負心があると申しまを扱自負との如何なる字義かと
考へて見ますると此自負と云ふの自惚と瘡氣と傲慢とを合併した様を奇
奇妙々變てこ來一種の根性で御座いまして一寸考へると大層むるい様で
御座いますが自負心のゆるの猶尻玉又臭氣あると同じ事で十人が十人誰
しも自負心のあるもので御座います人又して若しあの自負心がない時に
の蛆虫も同様で何の役にも立たず又人並すぐれて頭を持上る事の恐らく
出来ずまい故に瓢床の醜男子が情郎を自負して別嬪の前又目尻を下げ
涎を垂とを見れば可笑い様でのありまをそれとも其人に取ての情郎を氣取

らなければ愉快を覺へないからで御座います若し自負心も出さず愉快も
覺へなければ何を樂んで財布の底を叩きませう自負心があるからして愉
快を覺へまた此自負治郎があるから藝妓も口を養ふて居るので御座い
ます而して自負の人又於ける獨り愉快筋のみならず万事みな自負心に依
て成るもので御座いましてその例と擧て見ますれば自分の智慧袋の大ど
小とを皆誤大層らしく辨をひねって英雄を自負するもの抱腹に堪さ
い様でありまするなれども自負活あるが爲に能く英雄を真似て其流儀に
倣いんと思へばで御座います我うまれ附の馬鹿とも願はず學者を自負す
るもの馬鹿げた様でありますれども自負心あるが爲に學者の假聲を遣
つて法螺を江湖に鳴さんと欲するので御座います小商人も豪商を自負し
てあくせく業をはげま生職人も十分に親方を自負して刻苦腕をみがき裏
店社會もきは貧乏を粧ふて表店の人を自負せんと欲し下宿屋の書生さん
も學識を飾つて卒業の人を自負せんと欲し豆腐屋の甚だ柔かあるに似た

れども亦身代の堅固を自負し紙屑ひろいは汚穢物を扱ふと雖も亦ひと並
 の男を自負し三平二滿のお三とんの別品を自負して色男をよしらへ二束
 三文の安猫は仇吉米八を自負して鼻下長を擡にする等思ふも皆ろれ相應
 の自負心あるに因て各自に其業をはげそ其口を濡らして居るので御座い
 まするから自負心の人よ於て尤も貴重なもので御座います若しろれ醜男
 の一生が婦人の傍による事の出來ない貪乏人の何時までも金持に成る
 事の出來ないと極た日に世の中の事のあらず滅茶苦茶になつて仕舞で
 ありませうが唯自負心が有つて各自よ人に負まいと思つて骨を折ます
 ゆゑ馬鹿も一端の用を爲し阿房もまた應分の働きをするので御座います
 故に天下の馬鹿のせうしても人に及ばあいと思つて馬鹿に安んじて居り
 ましたならば随分さし支る事も御座いませう然て見れば馬鹿が利功と自
 負するも世の中の道具で御座いませう依て骨皮道人も大先生を自負して
 人並のお饒舌りをそる譯で御座いませうが斯の如く申して見れば自負心

も強ち悪い事での御座いません殊も國と國との戦争の時なと尤も自負
 心が入用で御座います何故となれば戦争をそるときも當つて自負心なく
 して此戦争は逆もかなはあい自己の方が弱から逆もダメだと尻餅を搦た
 目よ丸まけよ爲て仕舞ますが此時てんもに自負心を増長さしてナ
 彼奴等が何様も事を仕得るものか彼奴等がイクラ遣て來ても赤ん坊の腕
 を捻くる様もものだヤア來るなら縦ひ百万人でも千万人でも遣て來い片
 ツ端から半風子つぶしに仕てやるト各自よ自負心が有つたならば大抵な
 戦争に負る事ありません故に人の自負心の大層も功能のほるもので
 御座いませんと大喝采)

○居候先生に望む所あり

川柳子と云ふ奴の悪口と短所をホチクリ出すので飯を食て居るもので御
 座います其悪口の中でも能く引合に出るの居候お三とん乳母なとで
 其中でも居候を敵の様に云ひまするなれども何の誰何屋何兵衛の若旦那

と名前を顯はす譯でもないから眞逆に名譽回復を裁判所へ訴へて出る理
 屈にも行なまは横すつ方を張よめる譯も行なせんが其川柳の中にも昔
 しから人の知て居る句の「居候亭主のるすに仕候」居候飯と云いれて箒もち
 「居候四かく坐敷を丸くはき」など云ひまた落語家の居候の事を十階と云
 ひますが其譯のと云ふと二階の上に厄介に爲て居るからださうで御座い
 まそが兎に角居候と云ふと無性者と相場が極つて居る様で御座います去
 赤が居候だからと申して残らず無性者とはかり極つても居りますまい
 已又骨皮道人などは一年三百六十五日の中あちら此處又始終居候をして
 居りまそるから居候の組での随ふん功勞を経て居りますから若し居候
 の共進會でも開設あるか又の居候の試験でも有つたならば直様とび出
 せば先づ有功一等賞を頂戴し試験なれば履歴書と口答ばかりでも満点及
 第の積りなれども生憎まだ居候術が進歩しなから共進會もなく試験規
 則も出来ないのの道人常々自劣度おもふ所で御座いますとヒヤ〜夫れ然

り骨皮道人の右申す通り年箇年中居候をして居りますから随ふん居候
 の経験も實歴も確な積りで御座いますすが當時のせちがらひ世の中に彼の
 川柳子の云ふ飯と云いれて箒を持つ様も無性主義での逆もメメの川で御
 座いまして直れひ出されるに極つて居ります故に骨皮道人あとの居候
 の仕方ハ憚りながら權体ながら自慢ながら先づ朝ハ六時の時計がチン〜
 と鳴とソレ來たと飛起き夫からガラ〜と坐敷から臺所から窓から雪隠
 (オット雪隠と餘計で有つた)残らずの戸をゆけ戸をあけて仕舞と尻をまく
 ッて臺所の水瓶へナミ〜と水を汲込と其水を汲込んで仕舞と竹箒を以
 て門口とはさ夫から旦那と御新造の起るのを待て居て夜具とた〜み夜具
 をさ〜んで仕舞と座敷を丁寧に眞四角に角から角まで掃とばし其中にお
 三どんが味噌を摺はじめるから三どんに照會オット堅い聞合して豆腐
 を買に行きまた味噌のない時又は云はれぬ先に十六屋を呼こむ等かにか
 ら何迄ドン〜働さますから細君の機嫌ハよしお三どんハ脹れ面をせず

誠又安穩に修まつて行まそお負に居候をして居れば米相場が何程たかく成らうとも又米櫃が空乏よあらうとも味噌や醤油が種切でも如何したら宜らうと云ふ心配もなく其上からだは能く働らけば運動にあつて却て強壯になるから牛の乳を呑世話もなしと云ふ工合で御座いますから道人は世の中に居候はど氣樂で結構なものは無と思つて居りまそ然るに他の居候先生を見ますると矢張り天保時代の古風を守つて無性主義に安んト川柳の相場の通りソリソリして無駄飯を食て居りますからサア細君の沸々小言をなすべお三爺んは脹れ面をして碌に口も利す苦情百出と云ふ場合に立いたつて其末は細君から主人へコソツリ告發せられ主人も尻をつゝかれて見ればろの告發を証據不充分で却下する譯にも行すトウゝ何とか文句を附てお拂ひ箱おされるとは誠に憫然よ思ひ氣の毒で堪ふ様お存トます處から道人も同病わい憐むと云ふ譯でも何でも御座いませんが聊かその追出され先生の意中と察し一の心得書を御聞に達しませる

から願くは居候先生この心得書を守つて居候の舊習を改良せられん事を冀望いたしますエーンウフン

第一 凡ろ人の食客となる者の常に細君の喜怒如何に注意し氣轉を利かして御機嫌とりと怠る可からず

第二 細君が箆に錢と入れて振まひす時の豆腐屋と悟り柄杓を執て手桶を引ツかき回す時の其水汲なる事を知り命令を待たずして之を行ふべし

第三 細君が小兒を叱る時より子守を拜命せし事と思ひ早速に小兒をつれて表へ飛出すべし

但し小兒の菓子杯を横取するの敢て妨げず

第四 細君が坐敷まふは其他を眺めてオウ奇麗だ事とオツお言ふ時の掃除が不行届だと云ふ不平と肝をつけ直様箆を以て其邊を掃べし但し四角な坐敷を丸く掃べからず

第五 細君のお氣に障りたる事ありて主人に告訴さきたる時は是非なき事とあきらめ決して理非曲直の判別を望む可からず

第六 細君の目前に食する時の飯の三杯味噌汁の二杯より超過すべからず

第七 人來りて米相場またの世上の不景氣と談話するときは成たけ遠く逃て近よる可からず

第八 毎朝はやく起るの勿論の事として懶鼻樞の表裏を審査する杯も決して時間を費す可からず

第九 若しお三どんを召使ふ家あれば細君の次にいお三どんの機嫌を取り決して奴多福をど、罵詈譎の言葉を發す可からず

第十 お三どん氣轉と利して飯の盛方まゝは雑菜杯の最負を受たる時の公然と其禮言を陳べからず

但しかんくのふを極込て報酬するは適宜たるべし

右に陳せしたる十ヶ條のたゞ大略を擧たもので御座いますから此外は臨機應變に遣かし給へ(大喝采)

○似て非なるものゝ説

猫かハイ虎かハイ下手畫かきトハ似て非ある者のツボシを云つた悪口で御座います。此世の中には似て非なるものが澤山御座る。まゝと扱似て非なる者とは如何ある者かと申せは一方に宜ものが有つても又一方に悪いものがありて其宜ものと邪魔せると云ふ事で御座います。今その似て非なるものを擧て見ませれば先づ活潑と亂暴は似て非ある者なり。柔和と意思痴なしは似て非なるものあり。開化と生意氣は似て非なるものあり。ズボンと股引の似て非ある者なり。チヨツキと袖なしの似て非なる者なり。儉約とけらん坊は似て非なる者なり。娼妓と私窩子の似て非あるものなり。才子と猿狷の似て非あるものなり。洋犬と狎は似て非なるものなり。注意と臆病の似て非ある者なり。金とアルミの似て非なる者なり。羽織と半天は似て非なる

ものなりお心よしと馬鹿の似て非なるものあり尻固帯とふんぞしの似て
 非あるものなり尊敬とおべツかの似て非なるものなり愚弄とると常談との
 似て非なるものなり細君と權妻とは似て非ある者なり代言人と悶着師の
 似て非なる者なりお世辭と追従は似て非あるものなり鱧とわかごとの似
 て非なるものなり章魚と鳥賊との似て非ある者なり怠惰者と氣樂との似
 て非なる者なり學校と寺子屋との似て非なる者なり氣輕と輕躁との似て
 非なるものであり夜這と戸惑ひの似て非なるものあり瓦斯燈とランプの
 似て非なる者なり討論と喧嘩の似て非なる者あり演説と教説との似て非
 なる者なり競争と商賣がたきとの似て非ある者なり忠告と異見との似て
 非あるものなり忍耐と據るあしとの似て非なる者なり味附と糞との似て
 非なる者なり霍亂と虎列刺病との似て非なるものあり白砂糖と鹽とは似
 て非ある者あり新聞配達の鈴と寒詣りの鈴との似て非なる者なり銀と鉛
 の似て非あるものあり茶山花と椿の似て非ある者なり杯と饒舌て見れば

随ふん似て非なる者も澤山ありまそが似て非あるものは何處までも似て
 非なるもので御座います(大喝采)

○事は輕忽に處す可あらざ

轉々ぬ前に杖をつき石橋を叩いて渡れとの日本古來の諺にして無敵流儀
 の者を戒しめたる金言。天の未だ陰雨せざるに彼の桑土と採て隔戸を綯繆
 すどの毛唐人先生が不用心者流を戒めたる確言で御座います去れども文
 明開化の今日に當り此の如き兼言の殆んど儼が生て腐つて仕舞誰あつて
 此様な陳腐の言を心頭に留るものも無い様で御座います。が世の中、廣い
 から文明開化の世界だからとて随ふん不用心者流や無敵流儀の人が無い
 とも限りません。イヤ無心處でない昔日に比べて見れば却て多くなつた
 様に思はれます。故道人は是等の人々に忠告いたす心得にて此題言を擔ぎ
 出した譯で御座います。が前の二語は人たる者の常に心頭より留むべき金言
 で御座います。すれば決して陳腐なり馬鹿くしとて打捨たものでは御座い

ません(謹聴)く(エ)ン凡そ何事に限らず何物を論せず一事一業を爲んと
 思ふもの(ハ)必らず先づその事の自分の力に適當するか如何だか(ト)云ふ事
 とまた其事が(ハ)成度成就するか仕(ハ)いか(ト)云ふ事を定めなければ(ハ)又
 ろの事の成就するに至つては又これを維持する方法と鞏固し又これ
 伴(ハ)出て来る弊害(ト)云ふものを除去の準備をしなければならぬ(ハ)依て之
 を早く申せば(ハ)一事一業を企てんと思ふもの(ハ)決して輕々しく仕て(ハ)なら
 ぬ(ト)云ふに止まつて居ります(ハ)ヒヤ(ハ)夫れ然り然るに世間の人の中に
 何の目的を定めず其維持法を鞏固せず將たまた事業に伴(ハ)出て来る弊
 害(ト)除去の準備もなくして輕忽の(ハ)あひだに企て(ハ)浮薄の中に業を起して遂
 ふその事業を遣り(ハ)とげる事も出来ず否(ハ)の事業を仕(ハ)透げないばかりでな
 く莫大の資本金をうたかたの泡(ト)消し人にも損毛(ト)かけ(ハ)自ら身代(ト)を棒(ト)
 ぶ(ハ)り進退(ハ)これ谷(ト)まり首(ト)廻らぬ様(ト)爲(ハ)て初(ハ)て無明の醉(ト)を醒(ト)し長夜(ト)のゆめ
 を驚(ト)かして後悔(ト)すれども追附(ト)すして空しく裏店(ト)の長家(ト)に楯(ト)もりて借金

の云譯に(ハ)窮するもの近年(ハ)に至りて大層(ハ)ふへた(ト)聞(ハ)ました(ハ)が是れその人々
 の爲(ハ)には深くその不仕(ハ)合不運(ト)を憐(ハ)むべき(ト)で御座(ハ)います(ハ)なれども決して一
 人の不仕(ハ)合せ不運(ト)に止(ハ)まらず社會(ト)全体(ト)の不仕(ハ)合せ不幸(ト)と云(ハ)は(ハ)あければ成
 ません(ハ)ヒヤ(ハ)左様(ト)して斯(ハ)く社會(ト)の爲(ハ)め深く歎(ハ)ずべき(ト)不幸(ト)の出(ハ)て来る所
 以(ハ)の事業(ト)を企(ハ)だつる人々(ト)の万事(ト)かる(ハ)敷(ト)して深(ハ)き考(ハ)へ(ハ)仕(ハ)ないからで
 御座(ハ)います(ハ)左(ハ)を(ハ)道人(ト)は(ハ)あの一(ト)事の現象(ト)に附(ハ)ても彼の毛(ト)唐(ト)人(ト)先生(ト)の寐言(ト)
 の決して捨(ハ)つ可(ハ)からずして我(ハ)邦古來(ト)の諺(ト)のまた決して輕(ハ)々(ハ)看過(ト)ことの
 出来(ハ)ない事(ト)を感じる(ハ)に至(ハ)りました(ハ)ヒヤ(ハ)近來(ト)世(ト)の人の創設(ト)する會社(ト)な
 り商店(ト)なり何(ハ)あり箇(ハ)あり其(ハ)一箇(ト)人(ト)より成立(ト)もの(ハ)始(ハ)く置(ハ)き五人(ト)ある(ハ)ひ
 十人の寄(ハ)り集(ハ)まりより成立(ト)もの(ハ)見(ハ)ます(ハ)るに多(ハ)く(ハ)外面(ト)の飾(ト)を先(ハ)にして
 内部(ト)の整理(ト)を後(ハ)にし未(ハ)だ目的(ト)のキツト成就(ト)するか堂(ハ)だ(ハ)か(ハ)明(ハ)か(ハ)あせずま
 た未(ハ)だ維持(ト)の方法(ト)も考(ハ)へずして叨(ハ)に素(ト)的(ト)もない廣告(ト)文(ト)を新聞(ト)紙(ト)上(ト)にあら
 ぬし或(ハ)ひ(ハ)盛大(ト)ある開業(ト)式(ト)を執(ハ)り行(ハ)ひて夥(ト)多(ト)の客(ト)を呼(ハ)び集(ハ)め一圓(ト)の西

洋料理を奢りあんで數萬の酸漿提灯をぶら下げ是等の附景氣に依て社會幾多の人を瞞着其瞞着手段が旨く行ハ僥倖を得不幸にして其瞞着が外れれば一も二もあく半途よして打潰れるもの隨ふん少しとしませんか其事の劍呑なること實に深淵に臨み薄氷を踏が如しと些と頑固しいが捨くらなければかりません但し斯様亦無敵流の者は素より論外に措て宜しけれども甲乙の人間が已にこの無敵手段を用ゐて世人を瞞着せば縦ひ丙の着實の人間よして確乎な見込をつけ社會有益の事業を起さうと思つても社會の人々は前の甲乙にコリコリして居りますから其内幕も立入りて正直の會社だとか組織が確乎だとか熟知して居る者の格別なれど普通一般の外面ばかり見るもの必らず彼の甲乙の瞞着會社と同様に見做で御座いませう(ヒヤ)已に社會一般の人が丙を以て甲乙と同様に見做に至つて丙の迷惑の果して如何て御座いませう實に一方ならぬ事ての御座いませんか否獨り丙の甲乙の爲に迷惑するのみならず甲乙の實は社會の罪人と云つても敢て無理では御座いますまい(ヒヤ)然しあがら人間と云ふもの各良心の在るもので御座いますから誰しも自分から好んで社會の罪人とあることを快よしとする者の有りますまい其會社なり商店なり開設するの日の素より相應の目的あるは相違ない然れどもその組織が充分ならず前途の豫想が深からざる所から知らず社會に害毒を流し自分も人間に貴重なる信用を失ふに至るとの嗚呼何ぞに不用心にして轉ハぬ前又杖を突かないのであらうかと是れ道人が根底曖昧の會社を創設する人に向つて一片の老婆心を致し以てその注意を促す所以で御座いませ(大喝采)

○日用の往復文は簡短にして解し易きを要す

この演説題の少し尻痾固い演題で御座いますから石部金吉流に四角ばつて遣かしますから諸君のお積りでお聞取を願ひますエヘン父母親戚が幾千里の海山を隔て、居りまして半ペラの書を飛ばしますれば其安否

と問ふべく知己朋友が幾万里の波濤を経て海外に寄留するあるも一封の書を送れば其様子を尋ねべく貸金の催促するも二錢の往復郵便を以てすれば嫌でも應でも返辭と得べく品物を注文するも一錢の葉書を以てすれば用立どころも辨する等およそ日用の交際上寸時間も欲ことの出來ないもの日用往復の手紙で御座いますと斯く申せば何だか新聞の廣告文か用文章の序文めく様あれども今道人が殊更にかゝる冒頭を申すもの先づ書翰の必要なる事を説き併て目下の弊風を矯正せんとするの趣意を申し陳んど思へばで御座います(謹聴)夫れ書翰文の必要にして交際上寸時間も欲く事の出來なるのは今更ペラ(饒舌る事を要せず又ペラ)饒舌るも殆んど贅言の様で有りませすれども大凡万般の事物に於て大なる功力のある者のまた随がつて大なる弊害を持って居りまするが故に其功力を取て其弊害をとり除るに注意しければ利害あらび行なれて差引るの功力を失ふに至るもので御座います(ヒヤ)諸君よ現時世間

は往復する所の書翰文の果して完全平易の書翰文で御座いますか道人は決して今日の書翰文を完全平易と爲す事の出來ません否完全平易と爲すことが出來ない斗りでなく漸次よりの弊害が増加する様に思ひます何故とあれは彼の書翰文なるもの所謂言語の寫真で御座いますから何にても了解やすく恰もろの人に面會して談話する様に冗言をはぶき要用と摘み簡短にして用事の辨するを以て書翰の本旨とし贈答の必要とするので御座います。苟くも然らず書翰にしてその意通せず其用辨じなければ縦ひ幾万里の波濤を越たる知己朋友も贈るも何の益にも立ますま(ヒヤ)夫れ然り然に近頃の書翰文の大きいに之の反對にして動もすれば文中に漢語を交へ或は洋語を挿入れ或は平假名と片假名を合併したるもあり或は新聞の論説の如きものもあり或は支那の書牘に似たるものもありその体色々様々として一々かぞへ難けれども中にも甚だしきに至つては肝心の要用の針不の小さき冗言を書き並べて棒はどにし何となく

文章が旨いだらうと云いぬ斗りの誇り顔あるものありナント了簡ちがひの至りでの御座いませんか(ヒヤ)然れども斯る書簡を贈答する彼と我との間に於て平均の力と有し支那の書牘体を以てするも新聞の論説体にして配するも双方又差支なく通用して用向を辨する事が出来れば敢て不都合のなき様なれども甲に於て小六ヶしき理屈と並べ立つれば乙は之れに敵對するの力なきも所謂まけおしと云ふ抵抗心を起していろは字引や英語ひとり案内を穿索して甲より贈り越たる書翰を解釋し乙また答るに「田」然り而してを合併し博識多才の鍍金をかけ之を郵便に出す等の弊害の道人がまゝ見聞する所で御座います(ヒヤ)或る人の曰く諺に人を見て法を説けと云ふことが有るから書翰を贈答する者もあの心持で贈答をれば決して用辨又差支のなからうと成程あの御説の御尤もにて學者に贈るに固くるしき文章を以てし婦人に遣はすよやさしい手紙を以てすれば一も二もなき様なれども道人が思ふよ縦ひ何程の學者なりとて日用應接の言

語まで強がち小六ヶ敷理屈ばかりを以て應對する者でも有りませぬ然らば書翰もまた言語の寫真あれば學者の間に往復する書翰なりとて強がち小六ヶ敷理屈を記すに及びますまい故に人を見て法を説けと云ふ説も道人のまれを一弊の中に算へ入れなければなりません(ヒヤ)また近來小學生徒の教授用に供する爲め編著して世に散布する用文章類のその數百千を以て算ふる程ありますけれども惜い哉作者この弊害を矯正するよ意あるの稀にして大率ね世と推し移と云ふの歎また自分の學力を見せんが爲ある歎その文章めつ法かい六ヶ敷して兒童の作文を習ふの助けにのあらず却て煩雜の惑ひを惹き起すの傾向が御坐います又道人が尤も厭ひ嫌ふどころの弊害を誘導する様亦有様も御坐います例へば花見誘引と題する文例を見れば墨陀東台の櫻花爛熳淡紅を闘ひし黄鳥の梢頭に艶啼を試み雅客の吟杖を曳て花下に徘徊すなど吐表吐鉄もあい文句を並べ恰も紀事文か紀行文の様なお手本を出し或の物品を贈るに九牛の一毛

にも當らざる微衷とか猷芹の微意とか兎角に小六ヶしき言語を挿入れらるゝの抑々どうした御了簡いがある御見込で御坐いますか道人はるの御了簡が知れません(ヒヤ)夫れ西洋各國に於ての自から文法と云ふものが確定て居て日用往復文と紀行文論説文と誤多ませに成様亦煩雜いなくまた支那國の隨ふん六ヶしき隊長にて變方來の理屈を固守するとか云ひながら是また自から文法と云ふものが有りますから味増と糞とを一所まする様亦無茶苦茶の決して御座いません然るに獨り我邦に於ての未だ確平亦規則がない處から各々に其法を異にし勝手次第に杓子定規を以て遣かしお負よこのお手本を出す人まで其弊害のますゝ増加するを知らずして唯みだりよ小六ヶ敷ことを並べる事ばかりお骨を折るゝの恰も大火事の場所へ鐵砲を打ちこんで益々火事を大きくする様亦もので御坐いませう(ヒヤ)依て道人が茲に此れ饒舌りをして諸君の御賛成を願ふの決して六ヶ敷議論あるよ非ず簡短かに之を申せば書簡の言語と以て談話

とそるに代るの器械で御坐いますれば成るべき丈け了解やすく文意を綴り成るべき丈け讀みやすき文字を使い冗言とはぶき簡短平易にして意味の通じ易きを願ふので御坐いますが大方の諸君果して御賛成くださるか如何(大喝采)

○十把一のらげ

男子よ生れて藝者あるびを爲さないもの馬鹿あり故に毎日藝者屋或は料理屋に寐ころび又待合茶屋および船宿等に騒ぎちらすと以て極々情蕪とします然しながら自分の財布をはたいて此あそびを爲し誠氣の利かい譯で御坐いますから一切おれを止て藝者の身つき金を以て遊ぶ様にささいませ

二箇の翠玉を持ちながら女郎買を爲さぬもの頼魔なり故に毎日まいばん芳原根津品川小塚原よ潜りこぞ目茶苦茶よ居續もし夢我夢中よ浮れ込が宜しい然しあがら自分の金を持ち出す様亦助平的のダメですから女

郎買を仕様と思へば自分の金を出さぬいで女郎の仕送り金を以てする様にささいませ

人の頭を張り倒し人の横ッ腹を蹴飛すも随ぶん運動となり且つ面白いもので御座いますから少々位人の頭を張倒し人の横ッ腹を蹴飛すも宜しけれども頭を張り腹を蹴れば其人が火の様にあつて怒る者もありませんから斯様な開けない者の頭の張倒さない様よなさいませ

酒の百薬の長うれひの玉箒と云ひますから酒と飲のの實に結構で御座います然れども一升や二升のはした酒を飲ぐらならん寧ろ飲ぬ方が宜しい依て酒を飲ふと思ふ者の一度に四斗樽一本を飲乾す力があればお飲なさい尤も一合の酒に氷を九合まけて飲ひどの構ひません

金の世界の回りもの國家の寶で御座いますから自分の財布が空乏になつた時他人より借りて其財布に入れて置が宜しい此時に當つて親類に泣き付き友達に噛りつくの妨げなけれども金を借た後にツレ返せやレ戻せと

催促されての却て苦しいから斯様な人への金を借あいが宜しい他人が失策た時の目茶苦茶よ之を讒謗し他人の短所を見附た時あつて無暗に罵詈するが宜しいイヤ悪口を叩いても口に税金の入らなるから勝手次第で御座います然れども其當人が目の前に居なければ縦ひ罵詈謗するも所謂むだ骨折なれば悪口を叩くも功能なし故に甲の失策を聞ば甲の目の前に行て讒謗し乙の短所を見れば乙の目の前にて罵詈すべし

いくら利功でも裏店に居て熊八連中と交際すれば利功も馬鹿の様で御座います故に住居の立派な土藏造りか又の煉化造りにするが宜しい然れども地代の催促をくらひ或ひの家賃の延滞りを責る様な所には住居せぬがよろしい

別嬪に惚らるゝの男の仕合せで御座いますから自分の氣に入ら別嬪があれバ遠慮會釋もあく口説が宜しい然れども之を口説に當り殊更お外貌を粧はひ体裁を飾るの野暮で御座います依て別嬪を口説ときは必ず破れ着物を

若て頭髪を唐獅子の様にし齒糞を取らず手足に垢を積めを鼻汁二本をた
らして口説べし此体裁に惚るのが眞のはれるので御座います
向島や上野の花盛りの時ハ必らず馬車またハ人力車に乗て出掛け歸路に
ハ八百松か松源お立より藝者を呼で愉快を催すが宜しひまた千歳座新富
座の芝居が始つた時にハ先づ上等の棧敷を買切り充分に見物するが宜し
い然れども遣くり算段して翠玉を質にねき爲に跡ばらを病様ならばお止
なさい

旨い物を食はなければ身体がやせて五臟圓の看板の様になりすから毎
日ハ西洋料理もお食あさい會席料理もお食なさる餅もお食なさる汁粉
もお食なさる砂糖もお食なさる番椒もお噛りなさる然れども直接と問接
とを論せず總て人の厄介とならぬ様に氣を附てお食なさる

○馬鹿り利功

世の諺に人間ハ面附の違つて居る程こゝろも違ふと云ひまた十八人よれば

十色と云ますが成程ひろい世界にハ馬鹿か利功かサツパリ譯のわからぬ
人が御座います今その種類を勘定して見ますれば月夜に提燈を點けて歩
行ひとあう氷薬が飲にくいとて氷を増して飲む人あり買物をして残錢ハ
いらぬと威張る人あり聲に内証ばなしをする人あり無學の者又向つて洋
語や漢語を遣つて利功ぶる人あり無筆を知らながら内証手紙を遣る人あ
り女郎買又行て揚代をねぎる人あり人の驚くを喜こんで番椒を無暗お食
人ありはがき郵便の表面又親戚と書く人あり我子を利功だくと譽る人
あり雨ふぬれ赤がら蝙蝠傘を袋にいれて持て歩く人あり時計を持て居な
がら人に時間を聞人あり自分の失敗を自慢して觸れ歩く人あり基將基に
負て腹を立つ人あり芝居を見に行て寐て仕舞ひとあり天氣に雨傘をさし
て歩く人あり大聲を發して身代限りの揭示をよむ人あり寒中に單衣を着
て寒くあんど威張る人あり勿体あんど云つて腐た物を食人あり氷水を辭
退し生温くして呑む人あり肝癩をおまして皿鉢を叩き毀す人あり座敷の

真中で相撲をとる人あり茶番狂言を見て馬鹿くしんど理屈を云ふ人あり盲目を愚弄して喜ぶ人あり自慢らしく傳染病の患者も近よる人あり人の釣る傍に馬鹿面をして見て居る人あり西洋酒を畑して飲む人あり非免の人に向つて見舞を云ふ人あり東京に生れながら鹿兒しまの言葉を遣ふ人あり犬猫に向つて問はず語りをする人あり斯様な人の世間に澤山あります。が是れば利功と云ふので御坐いませうか馬鹿と申すので御坐いませうか諸君よろしく御嚙むけを願ひます

○情死を廢止よせべし

この世界に生て居る人間の情と云ふもの色々様々で御座います。が其中で男女が相通する痴情は奇々妙々不思議の事の御座いませぬ先づ人間の情の厚いの親子兄弟主と家來師匠と弟子と荒まし相場が極つて居ります。それ如何に親子兄弟の情だからとてお前と一所又暮すなら深山の奥の詫住居とは逆も行きます。又インラ主家來師匠の間からだと申して

も此世の縁の薄くとも未來の必ず一蓮托生との逆も行きます。(ヒヤ)然るお男女の痴情に至つては戲浮化体の搦梅で御座いまして一旦別嬪に見染られて此様な服御と添臥の身の姫ごせの果報ぞと絶り着れた日にやア何様な石部金吉でもグニヤくと海鼠の様に爲て身体も命もなつちも入らぬへ脊負てけ持てけト云ふの情を起しまして其末の死ぬより外に手段のないと手に手を取て墨田川にドンブリと遣かす幕になるので御座います。がナント痴情と云ふものは可恐もので御座いませぬか尤も主人の爲に死し親の爲に命を捨てた人も昔しから澤山あります。が彼の痴情に比較て見れば百分の一も當りませぬ。ナセこの眞實の情が痴情の百分一にも當らぬかと考へて見ると眞實の情の天賦の人情で御座いまして痴情の人造の人情だからで御座いませぬ其証據おの死ぬと云ふ事人間の最も嫌ふもので有ながら男女の間柄にて其交りが愈密になればその最も嫌ふ所の死を忘るゝと云ふ天賦の人情では御座います。(ヒヤ)故に其

情の寧ろ憐むべきも其痴の餘り擧た話しての御座いません昔し流行た謠に「情死しましよか髪切ましよか髪い生もの身はたから」云ふ文句が御座りまどが此謠を一寸はや吞込て聞て見ると大さう薄情な様で御座いますなれども能く／＼考へて見ると餘程よい文句で戒めに於る謠で御座います何故よい文句と申しまそると世は情死するは馬鹿々々しい事の有ますまい何程やれたからとて腫たからとて死で仕舞へば他所行にも平生にも掛替のなれ唯の一箇の性命を玉あしします道理お負に性命を玉なしにすれば男も女も旨い物を食ふとも出来ず面白い物を見る事も出来なから此奴は一番むかし風に立戻つて髪を切て髻を立た方が極手輕でよい様に思ひれます(ヒヤ／＼)然るに此節の文明開化にも拘らずソレ情死だや又情死だと薩摩屋の廣告の様に新聞も出て居りますが此情死と云ふの彼の惚た腫たの痴情から出て来るものには相違なければ何れも大切な命を玉なし仕あくツても宜き想なものの歎と思ひますれども其處の揔梅し

きは道人あどの不意氣ものには分りませんが想ふよこの場合に立至るの俗に云ふ魔にさるの色たとり死神より附れたとか申す調子合に運ぶ處から急におの娑婆に生て居るのが嫌ななりイツソ未來て夫婦となり蓮華のお座で氣樂に暮すが上分別たろうとフツと死神に欺され極樂へ旅立と變な目的を附て出掛る譯で御座りませうが扱おの極樂と云ふ處のどんな所でその娑婆から何里さきに有ることやら極樂へ行ば必然蓮華の明店があるものやら又明店がアツても雜作つきのものやら店賃が何程するものやら出立の前に電信で聞合して置けでもなし又地獄極樂の十萬億土もあると云へど誰しも地獄極樂の里程標を見よものも無ければ是も當みあらぬ話して御座いますヒヤ／＼然て見ると情死するの地獄御尤も如何さま極樂へ参れば極樂に暮せますと申す確乎な証據も御座いません然るも何れも此當にならぬ極樂行を望む人が多い歎と其原因を調べまると此目的の原因の色々御座いまして誰も死で極樂へ行のを好む譯でも

有ますまいし又イクラ惚ても最初から情死する氣で惚る譯でも御座いますまい必そ其初めよりお前百まで自己九十九まで共よ白髪が生るまでと云ふ目當では御座いませうなれども追々痴情の深くあるお隨ひ儘にならぬが浮世のならひ月にひら雲花に風と云ふ一件で二人で夫婦となり陸敷くらさうと思つて居るに兩親が之を許さぬとか或の借金が澤山出来て二進三進も始末おへなむとか或の世上の笑草となりて世間の人は顔ひけが出来なく爲たとか實に止を得ん次第に成り行て是れ死ぬより外に分別のつけ様が奇いと云ふ處から大切の命を捨る譯で御座いませうが何程兩親が不承知を云はふとも借金が富士の山ほど出来ても死ぬ氣になれば何様な事でも出来るで御座いませう然るに些細の事を心配して一夫一婦の死を遠るとい誠に馬鹿げた事て早く云へば狂氣と云つても宜い位で御座いませう(ヒヤ)尤もお半長右衛門やお染久松の時代のまだ日本も開けないで野蠻で御座いましたから情死をすれば意氣だとか色男だとか云つ

て淨瑠璃や芝居に仕組でもらつて後の世まで浮名をのまし色男の名譽にもありましうが當今は文明開化の舶來仕掛で命の成たけ大切にして一刻も長く此世に居たいとて牛の乳とのみ鶏卵を啜つて養生する時節で御座いますから情死をしたからとて誰しも譽る者になしれ負ふ新聞紙で吹聴されて黒暗の耻と明るとへ引出し親兄弟のもちろん親類朋友までの顔へ泥を塗る様なもので御座いますから一生懸命あつて情死した處が張合もなんにも無い譯で御座いますから道人のこの情死の話しを聞たび又世より酔狂な馬鹿があつた者じやと笑ひあがらも不憚り思ひます(ヒヤ)然るところ或人の云ふに情死する様も命づかひの荒い馬鹿のこの世も生て居た處がドウせ役にたぬ馬鹿ものなれば斯様な馬鹿ものになるべく早く死んで仕舞つた方が結局厄介ばらひで宜から厄介ものので死んで仕舞と情死を待てるものも御座います此説を聞いて見れば一應道理のないので有りませんがこれの餘り酷く過ぎますか道人の不

賛成で飽までも此情死をね廢止も致したい心得で御座います(ヒヤ〜)さ
 て情死をね廢止に至りたいと云ふに就ては色男諸君に忠告せねばならぬ
 事が御座ります諸君の御承知でも御座います古人の云つた言に生
 難く死は易しと申し戒めが御座ります成程の通りで死ぬのは何時
 でも死ぬる事ですから先づ心を落付けて能く後先を考へ彼の痴情に
 迷ふて死神が遣て來ても此處が辛抱とあると思ひ直し死んだ氣もなつて
 能く働き能く稼ぎさへそれバ金が出来ると思ひ直し死んだ氣もなつて
 れば何程借金が出来て居ても濟返の道もたち又いくら兩親が小言を並べ
 ても底が當世の自由の權で戀にふがれた女を妾に仕様ども勝手に出來る
 て御座いますから先づ情死は後まわしにして能く稼ぐ事を專一願ひ
 たいもので御座います併ながら斯様も申せば色男先生の去の反對に出
 骨皮道人は不意氣な男だけお察しのあい事を云ふ我々が情死を仕様どま
 であ決心したものが其様な馬鹿くしい譯柄で縁が切れるものでもなし

又可愛い女を見かぎり大切な男を見捨てる事は逆も出来るものでないト
 仰せらるゝで御座います如何様な御尤ものお言葉よて道人の強
 がち縁を切て仕舞たまへ互に思ひきり給へト申す譯で御座います道
 人はたゞ情死を見合にして昔しならば髪を切る處なれども當時の髪を切
 るのも餘り直打が有りませんからソコハ臨機應變で何にか新發明の氣証
 を作り死でも命の保る様な工夫をして貰いたいと申すので御座ります
 ナント色男先生いかいでせう右の様な工合にして情死を廢止でもらう
 譯よの参りますまいかチホン(大喝采)

○注意は平均にお頼み申す

諸君よ彼の雪降りの跡や雨降り後にて大道が汁粉も宜しくと云ふ泥濘よ
 歩くに誰しもかあらず杖を突き歩を緩めて徐々ど注意致しますから
 泥濘の中に轉がる者の少あう御座ります然るに平均でカヲ〜の路へ行
 ますると前又杖をつき歩を緩めしものも己にその難場を通つた難儀と忘

れまして我々らず注意の心が緩みて急な杖と邪魔よし又足跡の高いのを
 嫌ひ足を早めて行くと致しますから人の躓き倒るゝの多く泥濘にわらず
 して却て平坦でカラ／＼の地に御座います左れば泥濘を行に氣を附て轉
 ばなかつたからとて平坦の地に於て躓き倒れ彼の泥に染らぬいでも却て
 骨とくぢき肉を傷る等の憂ひを招きますれば前より泥濘に注意せしも何の
 益にも立ちますまい扱よろづの事な此道理で御座いますして事に臨み頓に
 氣を附けました處が平生にその心持がなければ何事も仕遂る事が出来
 ません好また其事を仕遂たと思つても是れ一時のマダレ當で御座いまし
 て其後にこれに倍増の災害が來ますれば却て一時のマダレ當を得るか
 た方が宜かつたよと思ふ事が御座います(ヒヤ／＼)故に何事もかぎらず心
 を用ゆるの平生にありまして事に臨んでマダレ當りと望むのゝ不可こと
 の道人のお饒舌を待たずして明かで御座いますなれども廣い世の中には彼
 の泥濘に注意して平坦の土地に轉ぶ人が澤山御座いますナント迂濶な話

しでの御座いませんか(ヒヤ／＼)諸君こゝろみよ願みられよ明治十九年の
 夏コレラ病の流行の際の新聞紙の報道に依てゲロ／＼ビヤ／＼の多きと
 且つ素敵滅法界の勢どに膽を潰し平日と養生は頓着しない人も俄に飲食
 に注意し或は友達の亂暴飲を意見する等の場合に立至つて人々たがひに
 注意せしゆる彼の虎列的先生も最早マダレと思ひ尻尾を下げて將に消滅
 せんとするの様子あるま當り人々は己に前の注意を忘れて鯨のござれ
 鮪も宜しい奴歩六も飲べし天麩羅も食ふべしと死はぐれの餓鬼が施餓鬼
 の小豆飯を食ふ様にムシヤ／＼食やらガツ／＼飲やら暴飲暴食と初めま
 したものだから折角に消滅しかけたコレラが再び立戻つて昨日までは五
 六十名の小數に至りしよ今日の俄に二百名内外のゲロ／＼を増加するの
 迷惑を來せし事が御座りました是れ即ち泥濘を免れて平坦の地に轉んだ
 ど同じ事での御座いませんか(ヒヤ／＼)モウ一ツ例を擧て見ますれば茲に
 一人の息子殿が御座いまして昨日の漸ばし柳橋の藝者に鼻毛をのばし今

日は芳原根津の花魁に現を扱し毎日ノンメンケラリに放蕩を極めるの
 場合に至りましては父母の意見するに勿論で御座いますが無様な細工を
 するか知れませんが先づ親類や知る人に頼んで金融の途を絶ち自分も
 また財産に注意し財布の口を固く必て金銭の顔も見せぬ様にして居りま
 す然るにこの息子が父母の訓戒を守りて着實に立働き柳橋芳原の迷夢の
 全くさめたる如くに見へまされば父母は注意を怠りて最早だに丈夫と思
 ひ爲替金を請取に出せば息子殿の二ツ返事で飛出し爲替金を懐中したま
 せドロンをさめ込み何時まで待ても来ぬと云ふ様な事は能く新聞紙で
 見る所で御座います是れは息子の不心得の申すまでも御座いませんが元
 來父母の注意が平均に行なぬからの災害で御座います是もまた泥濘を
 免れて平坦の地に轉んだと同一事で御座います(トヤ)夫れ一身上に關
 する是等の事とのべ是等の注意を教へますれば隨ふん澤山御座います
 獨に二ツや三ツの事での御座いません去ながら是等の事の害災とい申す

もの、僅に一身上の關係で御座いますればたい皆さん方の御注意を促す
 の外は御座いませんがこれと大小を異にする國家の重大事件に至りまし
 ては猶一層の御注意を仰がなければ成りません(トヤ)顧みますれば彼
 の五六年以前すなはち明治十五年の頃には各政黨員も隨ふん勇壯活潑の
 機で御座いましたが目今に至つては恰も火の消たる如くにて我々の局外
 者よりこれを見ますれば殆ど其意を解する事が出来ませんが廿三年が追
 追に目の前に來ましては矢張り従前の通り平均の御注意がありますか如
 何でと(トヤ)大喝采

○占ひは頓智なる説

世に占ひと云ふものが御座いますがこの占ひと申すもの泥坊の逃た方
 角を嗅出し別嬪を口説て先方が承知するや又の赤耻を搔せるかの二ツ一
 ツと判断し金がまうかるか損をするかの當をつけ腹の中に居る小兒の男
 か女かと云ふまで見當をつける者で御座います此占ひと云ふもの總

て頼智のもので御座いまして頼智が宜ければスボンに當り頼智が悪ければ丸でグレハマになるものじや想て御座います故に當るも八卦あたらぬも八卦と云ふので御座いませうが夫れで實に當にある様で當にあらぬい劍呑至極な譯で御座います道人のこの事について感心した事が御座いますか或人が船を泥坊に盗まれました或占者に見てもらいました處が占者の云ふお是の泥坊に盗まれたと相違あぬさうして此品の氷に縁のゆる物じや又ぬすんだ當人は近所の者じやと云ふに其盗まれ主の大變かん心して成程占ひと云ふもの能く當るものじやと驚て居ると占ひ先生の其顔付を見て鼻をヒコ付せナニ御心配より及ばぬ其中泥坊の方から持て來る運びになるから能く井戸端に氣を附て御いで成さいと云つたので其人はまた驚き何だ馬鹿くしい船が井戸端お置るものかハラボウかと怒つて歸りました想ですが斯様な間違は頼智が悪くからの事で御座いまして此男ヤ(く)然るは道人の友人は奇妙奇手れつ變方來の男が御座いまして此男

が常々占ひと致しませうが此男の占ひの難でも不思議に當らない事の御座いませんが想ふに是れ頼智が宜からで御座いませう一寸した事でも土曜の翌日の何だと聞ば日曜日だと答へ火事の始めの何だと聞ば其元の火から起ると云ひ夏の暑いことを知り冬の寒いことを知り雨降傘なしで歩行ば濡ると云ひ金と遣へば遣う程へつて仕舞と云ひ親父の自分より歳が上だと云ひお袋の必ず女だと云ひ雪の見なくつても白い事を知て居り人の物を無沙汰に持て行もの泥坊だと云ふなど中々奇妙の物知りで御座います夫ゆる占ひを頼む人が大さう澤山御座いますか一日道人が参りました時大勢の人の占ひとして居りまするのを道人が傍で聞て居りました處あかく頼智の宜いのに感心しましたから一寸の塩梅敷を御話し致します謹聴(く)第一に進ま出ました人の未だ歳若で御座いますれど餘は苦勞性と見へまして色々を取越し苦勞を仕ながら先生の前へ出ましたところ先生は一目見てハ、アね前さんの大變な苦勞性だから不景氣

が續いての仕方がないと案じて居る處だがナニいくら不景氣がついて
 食ふ事が出来なく成ても東京の人の氷さへ香で居れば大丈夫だナセあれ
 ば土地四里の冷水と云ふ事があるからと云ひれて其男の感心して歸りま
 した其次に進ま出ましたのの商法人の様に御座いましたか先生これを見
 ましてお前さんの何の商法しても皆屁魔お成て追々びんぼうも成ると云
 ふ様子だが外に仕方もないから先づ藁を賣て見さい左様とるとキット
 宜い違ひない何故ならば藁うる門にの福來ると云ふからと云とれて其男
 もまた感服して立去ました(ヒヤ)の次に來ましたのの書生風の人で
 御座いましたか先生の前へ出て云ひまするにの僕は何の學問を勉強して
 も一ツとして成就しないかふ是から目的を變じて簿記學を専門に至さう
 と存するが如何でせうと云ひし處先生は咳して成程うれの宜い志し
 て御座います去ながら複式斗りと學んで單式の見合す方が宜しからう何
 故なれば單記は損氣と云ふ事があるからと云ひれて書生さんは驚き入り

て歸りました其次は船頭らしい男で御座いましたか先生の前へ出て先生
 わたくしの船のり渡世の者で御座いますか昨日から船の底へ大穴が明た
 と見へまして潮水が注入して困りまするが如何したら宜しう御座いますか
 と云ひし處先生の答へて夫れの艦を押して功あし(勞して功なし)だから外に
 舟行(趣向)の仕方もしなしかだか底の木の附け様一ツで直るだらうと云ひれ
 彼の船頭も去者と見へて楫困りましたと云ひて出て行きました(ヒヤ)その
 次に這入て來ましたのの學校の生徒らしい子供が二人で御座いましたか
 此子供が先生の前へ出て云ひまするには先生ナたくし等二人が只今爭論
 と始めまして治りが附きませんから一寸裁判をして下さい其爭論と云ふの
 一人と午砲と聞たと云ひ私はまだ午砲は發ないと云ふのが論もありまし
 たので御座いますか今日午砲をうちましたらう駄まだで御座いますか
 と云へば先生は笑つて(ドン)より正午だ爭論の止とけいと云ひましたらば
 二人の子供もある程と感心して歸りました其次に進ま出ましたのの生意

氣らしい若者で御座いました。先生に向つて云ひまするには、僕の新聞雑誌の投書が道樂で御座います。なれども兎角に没書もありまして、誠に張合が御座いませぬ。此間も某新聞へ投書しまし、今以て紙上願ひれませぬが、堂した譯でせうか。一寸御判断を願ひますと云へば、先生曰く「テラの郵便の何時出されました若者曰く「たしか二月の三日と覺へて居ります。先生曰く「成程それでいぬ。咎だ何故なれば、其日の拙文(節分)とか負(カ)ノトムマ(彼の顧問)の日だ若者曰く「さうでしたか。全体投書の日、何時が宜しいでせうか。先生曰く「詩ならば、投詩(冬至)文章なれば、新文(春文)が宜しい。尤も滑稽物のトリの日が宜しからう。鶏の滑稽好と鳴からト云ひれて、彼の若者の感心して、詩歌らば草いたしませうと禮を云て歸りました(ヒヤ)く、その次に、出ましたの、一癖ありさう。人物で御座いました。が先生の前より出て、私は「ヤウギが大好で御座います。が其癖、いつでも勝利を得た事がなくて、誠に困ります。が堂したら宜しう御座いませうか。と云へば、先生の「エ、ンと咳

拂ひして「ヤウギを刺すに、先づ飛車道をわけ、歩意を食ぬ様に氣を附て、角行を十分よし、金銀を澤山もつて、王手(逢て)と出掛れば、きつと勝利を得るものトやと云ひ、れて其男の勝ですか。と勝知して歸りました。其次に参りましたの、碁ずきの人で、御座いました。が先生に向つて、私の碁の道樂者です。が「クラ目を白黒して打ても負てばかり居ります。が堂したもので、御坐いませうと云へば、先生曰く「今日行て打て、御覽なされば、きつと宜しい如何なれば、碁客の勝負だからト云ひ、れてその男の碁苦勞さまと挨拶して歸りました。其つぎに出ましたの、益槍した男で、御座いました。が先生に向ひ、私の昨夜齒の抜けた夢を見ました。が善で御座いませうか。悪で御座いませうか。と云へば、先生曰く「これも齒なしの種だから、悪くも無からうト云ひ、れて其男の成程と口をどちて歸りました。其つぎの顔色の蒼い女で、御座いませぬ。が先生の前に進んで云ひ、まゐるに、私はあのせつ病氣で困ります。が早く全癒せうか。如何で御座いませうと云へば、先生の「その様子を見て、あれ

は子袋の病だから子宮(至急)には全快しまいと云はれて其女之(醫)家様さう
でそかと落膽して歸りました○夫れ此の如く頓智を以て万事に氣を附て
世渡を仕ますれば決して遣そふさいの御座いませんから諸君もし占ひ者
に見て貰うならば斯様を頓智の宜ひ人に見てお貰ひさい是の即ち當る
發戯で御座います(大喝采)

○歳晩の話

毎日あさ起て朝めしを喰ひ夫れから三四時間過ぎて晝めしを喰ひ又三四
時間過ぎて夕めしを喰ひ毎日く同ト事をして二十八日および三十日三
十一日等の月を経て一年三百六十五日となります左様してこの一年三
百六十五日の中に種々様々の事柄と笑つたり怒つたり泣たり面白うつた
りの變化は御座りませぬも大抵はソラソラ暮して仕舞に大晦日の切迫
となりまするとサア梁屋のいもて口から吐鳴こむやら薪屋の裏ぐちから
責めかけるやら或の酒屋のひは炭屋のひは何或の何と四方八方から

遠慮會釋もさく押掛て來ますから骨皮道人なぞの古人の句の通り今日
にあり菊造らうと思ひけり」と云ふ一件で急に前非を後悔して俄に働く心
持になつても死んだ子の年勘定と同じ譯で如何しても追附あくてマゴく
するのの毎年さまつて居る様で御座いまするが或の大晦日の事で御座い
ましたが道人が右の鬼にせめられて苦敷つてたまりませんから何とか旨
い工夫のさいものかと盆槍して考へて居りますると裏の井戸端で山の神
がガヤ／＼と會議と初めましたから此奴の面白いと耳を澄して聞て居り
ますると熊的の細君が云ひまするに「お豆さん嘸いろが敷だらうねへ月
日の経過の早いものじやないかお互よ彼の蚊帳を曲て芝居を見たの
ツイ二三日まへの様だがモウ一年になるヨ呆れ返るじやアさいかお負に
今年は不景氣で宿六の仕事のあし餓鬼の一疋ふゑるしサ本統よこの暮
を困却あどいなないヨ夫に差配の禿あたまの此のひぶから毎日く遣て來
やアがつてサア今日の堂だサアよませ愈々できあけりや此處を立のけノ

ヤア一刻も置かしの出来あいなんかど引強なこと斗り云やアがるのだヨ
 何程なんぶって家賃の四ヶ月や五ヶ月たまったって宜じやあいかマサカ
 家まで脊負て逃やアしまいものをリ夫にいよ家賃を遣ちやヤ餅を喰ふこ
 とも出来あいなねへト出鱈目を饒舌ればお豆は其調子に乗て本統にさう
 だヨ彼のはげ頭の瓢床にの妾もホトく閉口だヨ妾の内なんざア家賃を
 まろか彼の阿魔的のモウ年頃だからやア鬮掛がほしいノ半襟が何だのと
 見る物さく物をはしがるので本統お困るの困るもの、親の身に成て見れ
 ば人並の姿いさしたし左右するにの○がないから断然ろこばくとカ東髪
 とか云ふ流行の鍋しき頭にして胡麻化さうかと思つて居るのだが頭ハ夫
 にした處が綿南部の春着一枚位はこしらへて遣なけりやアならず又妾だ
 ツて絹製まへ掛ぐらゐの持へ様と思ふしサとお饒舌の際中よドーンと十
 二時の大砲がなりましたから山の神は驚てオヤモウ十二時だよ本統に日
 が短いねとお饒舌半にして歸りましたが其とき道人の之を聞て驚き且つ

歎息いたしました何故なれば暮あひて困るののち自分から招いた苦
 しき御座いまして何も不景氣のせへでの御座いません何程景氣がよく
 ても春早々からノンメンガラリに遊んで果報を寐て待て居て歳末になつ
 て手前勝手の理屈を並べた處が仕方のあい事で御座います然るに自分の
 ノンメンガラリは棚において差配人の家賃を責るを悪く云ひまた家賃を
 踏倒してまで餅をつきまた我子に綿南部の着物をもさせ自分も絹物を身に
 附やうと思ふの實に飛でもあいた簡ちがひの事での御座いませんか(ヒヤ
 く)然れども是の裏店の愚痴で御座いますから了簡ちがひは了簡ちがひ
 でも左まで青筋と出して騒ぎ立てるにも及びませんが是と同じ道理で極た
 い切な事が御座います夫れは何様か事かど申しますると外でも御座いま
 せん人の少年の一生中の春時で御座いまして智識の種を蒔ときで御座いま
 ます然るに世の少年諸君の茲にお氣が附れて居るかお氣が附ないのか大
 抵の揚弓店や女郎屋にゐる附き大切の學資を棒にふりまた大切な月日を

無益に費し毎日ノンメングラリに暮して居らるゝ方が澤山御座いまするが是ころ了簡ちがひの第一等で御座います何故なれば此人達が年を取て二進も三進もアガキの附かぬ時になると彼の裏店の山の神が愚痴をこぼすと同じ様に自分がノンメングラリに遊んだ事は棚におき何か人のせへの様にグツグツこぼしゝ處が追附なぬ話して御座います否おツ附あいなりでなく彼の裏店の愚痴は能く働けば取返しが出来ますが少年の怠けたのり老て後イクラ愚痴をまばしても取返しが出来ませんが少年諸君の能く春時かゝ勉強して老てのち愚痴をまばさない様に平生からお心掛が肝心で御座いますとハケ序に一寸御忠告いたします

○ 恐るべき説

地下の大あますが一度尻尾を動かしたまればグラグラユスユス遠慮會釋もなく家庫を打つゝし人の命をとる事が御座いますから地震は實に恐るべきもので御座います天上の雷公が一たび大太鼓を擔ぎ出してゴロゴ

ピカピカと無暗矢鱈に人畜草木を害する時に俄々様の字と附ても桑原桑原と唱へても雷公の少しも聞入て呉ませんから雷の實に恐るべきもので御座いますジャンジャンの半鐘で目をさましたソレと云ふ間に火の勢がおひく強くなり脚筒を擔ぎ出す間もなく早すでも數百軒の家が灰にあつて仕舞ますから火事は實に恐るべきもので御座います一夜の愉快で親父の耳に入り昨夜は何處へ行たとのお尋を蒙りその返事の曖昧さ處から終に尻が可れ此馬鹿治郎め不埒千万お奴と大目玉を頂戴すれば親父も實に恐るべきもので御座います此四ツのもの昔しから恐るべきもの、座頭で御座いますから今更こゝに之と云ひました處が敢て面白くも御座いませんが先づこれを看板に出して置まして是から色々の恐るべき事柄と並べ立て御聞に達しませう(謹聴)それ平生は養生に氣を附ない人の其報ひ目の前に顯はれケロくピチピチ百吐千瀉の一件で俄に石炭酸を撒き散るも何の役にも立たず醫者殿へかけ附ても醫者どのの未だ診察もし

を防ぐも其方を以てしますれば其恐るべきものも免れる事が出来ず即ち雷を避るに之避雷柱あり地震と避るに(是は困った)先づ鹿島の要め石を信仰し火事を避るよ火の元に用心し親父の怒つた時よ旨く機嫌をとりにコレヲ病を避るには食物を用心し洪水を避るよ堅固の堤防を築く等うれしくあろの注意とまそれば世界中に恐るべきものは御座いますんが茲よ只一ッ豫防の出来ない世界中で第一恐るべき者が御座います夫の如何あるもの歟と申しますると即ち婦人で御座います抑々古來から今日まで英雄豪傑と凡倉治郎と問はず女の爲に國を亡ぼし女の爲に身を誤り家をやぶる者の勘定の出来ない程御座います故に道人のこの豫防法のない外面如菩薩内心女夜叉を以て恐るべきもの、第一と致さうと存じまそが諸君の如何に思召や(大喝采)

○重言くらべ言葉の上あし

道人の随ふん饒舌くたびれましたから最早これにてお仕舞に致さうと存じまそが其お仕舞にするに當つて一寸諸君に御忠告いたすの、即ち重言で御座います此重言と云ふもの誰でも能く云ふ奴で御座いますか是のみな自分よの氣が附ないでウカ／＼口の先へ出るもので其中の餘程おかしなことがありまた飛た恥をかき事御座いますから言葉の氣を附おければならぬもので御座います今うの大略を並べて御聞お達しませうエ

新米の米○二度と二度○山中の山中○日中の日中○夜夜中○過慮にそざる○半紙のかみ○寫具を寫す○あらひ洗濯○わたらしい新聞○土藏の藏○新酒のさけ○紅梅のうめ○人の人情○七面鳥のどり○重言を重て云ふ○つまり到底○あかい緋縮緬○早朝の朝○怪談咄し○雨中の雨○唐の唐人○見て御覽○冷たい冷飯○洗湯の湯○名薬のくそり○夜店の店○木の葉々○常紋の紋○ほとけの佛壇○傳染病がうつる○腐た腐敗物○吐血を吐○圓い満月○豊年の年○三十日の日○年寄た老人○佛參まゐり○實

印の判 ○ 寶父のおや ○ 眞白の白犬 ○ 針の運針法 ○ 半鐘の鐘 ○ 賽銭のせよ
 ○ 泉水の水 ○ 蒸氣船の船 ○ 窮屈窮る ○ 下男の男 ○ 眞暗やみ ○ 拔身を拔 ○
 蓮華の花 ○ 寶珠のたま ○ 田地田畑 ○ 御々足 ○ 理解を解 ○ 虻虫のむし ○ 家
 の家傳 ○ 眼下に見下す ○ 時代時節 ○ 大事の事 ○ 全く全快 ○ 後で後悔 ○ 進
 物もの ○ 人が無人 ○ 五色のいろ ○ 眼前めの前に於て ○ 名だたる名人 ○ 大
 きな大佛 ○ 遺恨のうらみ ○ 上品のしち ○ 出来ものが出来た ○ 變が變つた
 ○ 甚しい甚暑 ○ 球の珠敷 ○ 晝日中 ○ 安くと安産 ○ 大きき大醉 ○ 短い短
 刀 ○ ぢるい團子 ○ 廻文と廻す ○ 人の人相 ○ 餘寒のさむさ ○ 何月の月 ○ 美
 しい美人 ○ 船の船頭 ○ 町内うち ○ 神前の前 ○ 續て相續 ○ 毎日日勤 ○ 家内
 うち ○ 寶子の子 ○ 白髪 of 髪 ○ 持病もち ○ 日傭に傭ふ ○ 都合あはせて ○ 乾
 物もの ○ 遠路の路 ○ 珍らしい珍物 ○ 馬から落て落馬 ○ 寒竹の竹 ○ 買もの
 を買 ○ 平等平等 ○ 寶藏の藏 ○ 御光の光 ○ 御祭禮お祭番附 ○ 西の西方彌陀
 如來 ○ 頼光源頼光 ○ 信州信濃 ○ 妻子子ども ○ 板木いた ○ 下へ下る ○ 上へ

上る ○ 口中の口の中 ○ 至極至つて ○ 流行の流行うた ○ 重寶あたか物
 扱右の通りサツと荒増かん定して算へて見ましても人々皆様が一月の元
 日の日から大晦日のつどもり迄一年三百六十五日の日數の中は照降の晴
 雨おも拘らず御口中の口の中から思はず知らず不意くと重言を重て言
 へるゝので御座いますか何卒どうぞ平生ふだんに氣を附て御注意を願ひ
 ます(大喝采)

拍手滑稽獨演説終

明治二十年三月四日版權免許
全 年四月 出版

正價金五十錢

編輯兼出版人

東京府平民

千葉茂三郎

京橋區銀座二丁目六番地

發兌所

京橋區銀座二丁目六番地

共隆社

印刷所

京橋區和泉町五番地

山田活版所

大賣捌所

京橋區南鍋町

兎屋誠

日本橋通三丁目

丸善書店

同 區銀坐四丁目

博聞社

同 同 四丁目

春陽堂

日本橋區横山町三丁目

辻岡文助

同 本石町二丁目

上田屋榮三郎

同 同町二丁目

鈴木喜右衛門

同 本町三丁目

金港堂

同 橋町二丁目

鶴聲社

神田區淡路町

巖々堂

稗史小説出版書目

三木愛花仙史校閱并序

○名將遠征奇縁

洋装美本全壹冊 (版權免許)

一名西洋水滸傳

此書ハ日本の豊臣佛國の那翁と并峙する一英雄が卑賤より崛起して中央亞細亞を席卷し終に覇業を開きたる一代の戦記にして以て近年世論の喧しき中央亞細亞の大局を知るべきなり而して其間壯士の志と重なるあり名族の義に依るあり名士佳人の離別を重なるあり忽にして悲壯慷慨忽として流麗婉轉讀で罷の了るを覺えざるの稗史なり

三木愛花仙史原著 中村柳鳩編述

○芳春百花魁

洋装美本全壹冊 (版權免許)

政海の波文苑の叢以て經となし風流都雅人情婉轉以て緯とあし其間美人長樂の未央を恨み才子時事の變動に感じ暹上み花媚び東台に鶯歌ひ畫橋の佳會青樓の琴心東都の佳話大坂の奇獄忽哀情切々忽感慨勃々既にして風雅慕ふべく奇想驚く可く一讀手を離すに堪へざるの書是を樂て夫れ復他に無かるべし

三木愛花仙史閣○田中清風著

○政海官員氣質

洋綴繪入全一冊 (版權免飾)
正價金五拾錢

此書ハ才子美人の離合集散を本として官員社會の内情を寫出すと上等官より等外に到るまで拂袴折腰の工合休日の様樣昇街退省の様子地震の騷動等其身其中に在りて其事を見る如く其間に古名士今奇人の義聞勇談を挿入し悲壯涙を拂ひしひるあり凛冽髮冠を突かしひるあり況又美人の瀟情才子の艶聞を記したる十九世紀官海の寫真鏡とも云べき珍書あり

○佛國セルバント氏著○三木愛花仙史閣○齋藤良恭譯

○歐州谷間乃鶯 洋綴密書入全一冊 (版權免飾)
正價金五拾錢

此書は西班牙國の一名族の子弟と一紳士の處女とが冥々の離たるを知らずして血縁を通じ思離纏綿一離一合斷腸すべく悲憤すべく哀痛を骨子として編成し其間お羅馬の懷古又離黍の涙を酒ぎ月湖の奇偶に百年の縁を了し變幻出沒の新小説にして佛國巴里に於て紙價を貴からしめたる文章流暢趣向優美の原書を姉轉自在の筆を以て翻譯したる稗史なれば幸々看官一讀して其奇書たるを知り給へ

1870
1871
1872
1873
1874
1875
1876
1877
1878
1879
1880
1881
1882
1883
1884
1885
1886
1887
1888
1889
1890
1891
1892
1893
1894
1895
1896
1897
1898
1899
1900

特51
905

091706-001-4

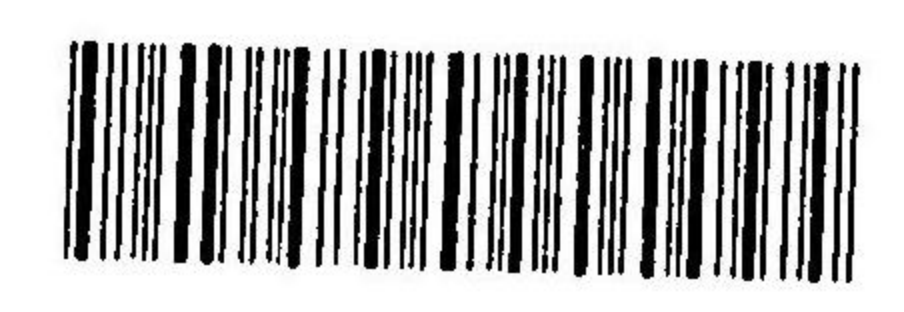
特51-905

滑稽独演説

瘦々亭骨皮道人 / 演説

M20

DBO-0178



515 P90

